

アジアとは何か

——Global Asian Studiesの再出発——

中島 隆博
上田 遥
園田 茂人
パッタジット・タンシンマンコン
田中 有紀
渡邊 祥子
キム・ジユン

 東洋文化研究所
Institute for Advanced Studies on Asia

 GAS
Global
Asian Studies

アジアとは何か

——Global Asian Studiesの再出発——

はじめに	1
中島 隆博	
第一章 Asia-ing(s)	3
中島 隆博	
第二章 圧縮近代のなかのアジア	16
上田 遥	
第三章 GASという企図 ——過去の省察から将来のビジョンへ——	32
園田 茂人	
第四章 東洋文化研究所のGlobal Asian Studiesを どう定義するか	44
パッタジット・タンシンマンコン	
第五章 GASとは何か——私の経験から——	53
田中 有紀	
第六章 アジア・アフリカ域内研究交流に向けて	62
渡邊 祥子	
第七章 身近なアジア	74
キム・ジユン	
編著者紹介	83

はじめに

—— 中島 隆博

アジアとは何か。東洋文化研究所にとっても、GAS (Global Asian Studies) にとっても、その存立に関わるほどの重要な問いである。とはいえ、普段この問いが問われることはなかなかない。というのも、ここでの「アジア」は指標詞のような働きをなして、他の指標詞たとえば「いま」「ここ」「わたし」のように、いつ・誰が・どこで・どのように語るのかによって、その内容が変わってしまうものだからだ。そうすると、実体としてのアジアを設定できない以上、what による問いは、アジアの本質を指示したところで完成しない。必ず、いつ・誰が・どこで・どのように語るのかを考慮しなければ、アジアはただの空虚な概念である。

こうした困難を抱えつつ、GAS では 2026 年 6 月 9 日に、「アジアとは何か」をともに探究するシンポジウムを開いた。幸いに、ここには老若男女、様々な国籍、異なる研究領域と、グローバルなアジア研究に不可欠な多様な研究者が集い、七人七色のやり方で、問いを探究してもらった。それぞれの問いの深め方を味読していただければ、21 世紀におけるグローバルなアジア研究の可能性が垣間見られるのではないだろうか。

発表順に紹介しておくと、中島隆博、上田遥、園田茂人、パッタジット・タンシンマンコン、田中有紀、渡邊祥子、キム・ジユンの 7 名ということになる。

おそらく、東洋文化研究所において、正面きって「アジアとは何か」を問うことはこれまであまりなかったと思われる。所名にあるように、「東洋」という実に近代的な概念のもと、学術編成がなされ、それを疑い、英文名称だけではあるが、IASA (Institute for Advanced Studies on Asia) として「アジア」を掲げたのは 2010 年、つまり 21 世紀になってからであったからだ。無論、東洋とアジアはまったく異なる概念で、アフリカ、オセアニア、ラテン・

アメリカへの関与の仕方もあらためて問われることになる。わたしたちの議論で、アジアを複数形で語る意味について考えたのも、アジアはすでに動的なダイナミズムのなかにあり、多くの接続と切り口を備えているからである。

来るべきアジアに向かって、「アジアとは何か」という問いに、読者の皆さまも是非関与していただければと念じている。それは根本的に、開かれた問いであるからだ。

2026 年 7 月

梅雨の明けんとする東京にて

一 アジアの語り方

21 世紀の今日、アジアをどう語るのがよりましなのか。オリエンタリズムの対象として、近代西洋の認識論的カテゴリーによって枠づけられることも、もはや許されるものではない。また、そのオリエンタリズムを内面化した、内なるオリエンタリズムによって、アジアを語ることも、同様に控えなければならない。すでに、ヨーロッパ vs. アジアという二項対立は揺らいでおり、歴史の中で、対称的ではないにせよ、相互浸透や相互変容が生じている。

かつて竹内好（1910 ～ 1977 年）は「方法としてのアジア」（1961 年）の最後において、次のように述べた。

西洋が東洋に侵略する、それに対する抵抗がおこる、という関係で、世界が均質化すると考えるのが、いま流行のトインビーなんかの考えですが、これにもやっぱり西洋的な限界がある。現代のアジア人が考えていることはそうではなくて、西欧的な優れた文化価値を、より大規模に実現するために、西洋をもう一度東洋によって包み直す、逆に西洋自身をこちらから変革する、この文化的な巻返し、あるいは価値の上の巻返しによって普遍性をつくり出す。東洋の力が西洋の生み出した普遍的な価値をより高めるために西洋を変革する。これが東対西の今の問題点になっている。これは政治上の問題であると同時に文化上の問題である。日本人もそういう構想をもたなければならない。

その巻き返す時に、自分の中に独自のものがなければならない。それは何かというと、おそらくそういうものが実体としてあるとは思わない。しかし方法としては、つまり主体形成の過程としては、ありうるのではないかと思ったので、「方法としてのアジア」という題をつけたわけで

すが、それを明確に規定することは私にもできないのです。(竹内好「方法としてのアジア」、『竹内好全集』第5巻、114～115頁)

ここで言われている、「この文化的な巻返し、あるいは価値の上の巻返しによって普遍性をつくり出す」という言い方は、西洋＝普遍、東洋＝特殊という設定を根本的に転倒し、東洋から普遍に貢献する道を開こうというものだ。ただし、ここでは「方法としてのアジア」という概念を用いている。これはその後人口に膾炙し、「方法としての中国」(溝口雄三、趙汀陽)としても用いられたものだ。

二 強い思想主体

問題は溝口や趙が主体の消去に向かうのに対し、竹内は「主体形成の過程」を強調し、主体の構築に向かっていたということである。この背景には失敗に終わってしまった「近代の超克」論争(『文学界』での座談会、1942年)がある。竹内はそれを厳しく批判し、空虚な主体しかないと断じた。大阪高等学校の同級生であった保田與重郎(1910～1981年)とその日本浪漫派を取り上げて、こう述べる。

保田は「生れながらのデマゴーグ」であって同時に「精神の珠玉」であった。デマゴーグでなければ精神の珠玉たりえない。それが日本精神そのもののなのである。保田は限定不可能なあるものであり、そこから逃れることのできない日本的普遍者の究極の一つの型である。「空白なる思想」が彼の思想であり、空白でなければ不死身であることはできなかった。保田を限定可能な、実体的なものとしてとらえようとしたために、杉浦[明平]ばかりでなく「文学界」的知性もまた失敗したのである。(同、60～61頁)

つまり、保田與重郎という日本浪漫派の代表者は、その「空白なる思想」によって、思想を絶滅させるものであった。それは、ドイツロマン派とは異なり、「復古の側面によってでなく終末論の側面で作用したと考えられる」(同、64頁)。

ところが、座談会「近代の超克」の主力である「文学界」の知性はその終末論を思うように扱うことができなかった。そのために、それは「保田のもつ破壊力を意味転換に利用するだけの強い思想主体を生み出せなかった」（同、65 頁）のである。

三 終末論

この後、竹内は「強い思想主体」を生み出すため、終末論¹に向かっていく。ここにはキリスト教の影が忍び込んでいるが、内村鑑三に言わせるとキリスト教はアジアの宗教であるので、アジアにおいて終末論を語ることに不足があるわけではない。また、中国においても多くの終末論的運動があったことを考えると、竹内の方向性がすぐさま間違っているわけではない。

しかし、その終末論は、次のようなものに極まった。「終末観について」（1961 年）という文章のなかで、竹内は中国文学研究会に触れて、その設立よりも解散に意味があり、「結社は解散を目標にして進むべきだ」（『竹内好全集』第9巻、294 頁）と考えるようになったという。そして、結社には国家も含まれているので、国家もまた解散すべきだというのだ。

私は、日本国家にも、解散規定を設けることを提唱したい。そうしない
と愛国心はおこらない。（竹内好「終末観について」、同、294 頁）

問題は、「愛国心」である。それは、自然的な感情あるいは自然主義的に了解される感情ではない²。国家の「終わり」が想定されてはじめて登場する、反自然主義的な主体が有する「愛国心」なのだ。

1 丸川哲史が「竹内好が終末観、終末思想を語ることは、機会としては少なかつたものの、しかし決定的なモメントではないか、とも思われるところがある」（丸川哲史『竹内好——アジアとの出会い』、216 頁）と述べていることを参照のこと。

2 竹内の「感情」をロマンティズムとナショナリズムとの深い関係から論じたものとしては、“Literature and its Dangers” (Richard Calichman, *Takeuchi Yoshimi: Displacing the West* 所収) を参照のこと。また、別の文脈であるが、孫歌は、竹内が戦争記憶に浸透する感情とその共有困難さという問題を立てていたとして、それを「感情記憶」という言葉で考えようとしている（孫歌『竹内好という問い』、204～205 頁／孫歌『アジアを語ることのジレンマ』、68～77 頁）。

四 アジアの原理

しかし、もしそうであれば、別にそれは日本国家に限定される必要などないだろう。いかなる結社のあり方であれ、終末を意識した時点で、何らかの反自然主義的な「強い思想主体」が登場することになるはずだからだ。

わたしは、この主体は決して強いものではなく、「弱い思想主体」であろうと考えている。それは、終末のような強力なテロス＝目的も不要であるし、「愛国心」のような設定も不要である。

竹内は「日本とアジア」（1961年）において、「より高い、より広い文明観」（『竹内好全集』第8巻、91頁）を発見する努力が不足していたと指摘している。その上で、こう述べた。

文明の否定を通しての文明の再建である。これがアジアの原理であり、この原理を把握したものがアジアである。この場合、エセ文明を虚偽化していく作用はエセ文明の内部にいるものだけが担当できるのであって、外から力を貸すことはできない。独立が文明の恵沢でないのはそのためである。独立はあくまで自力でかち取る以外に達成できない、という確信はアジアのナショナリズムを普遍的に貫いている。

福沢は、この原理を直感していたと思われる節がある。ただ彼は、日本の植民地化の危機が未然にふせがれた後では、それを理論化せず、かえって力による文明の強制を是認する方向へ後退していった。（竹内好「日本とアジア」、同、91頁）

つまり、「アジアの原理」という理念が設定されなければならないのである。それは、「愛国心」なるものに還元されることはない。無論、「アジアの原理」は何らかの感情的なものに基づくものであって、近代的な理性ではない。近代文明が前提する国民国家や主権といった枠組みを超えて、アジアが繋がり、連帯すること。これこそが「アジアの原理」なのだ。

わたしはそれを Asia-ing (s) と表現したいと思う。アジアは「アジアする」プロセスであって、それは複数形に開かれたものだと考えるからだ。それは、実体としてのアジアでも、方法としてのアジアでもなく、相互浸透し相互変

容し続けるダイナミックな連帯である。

五 近代による超克

同様のことを、廣松渉（1933～1994年）も述べていた。廣松もまた、竹内と同様に、「近代の超克」論争を取り上げ直し、それを右派から左派へと奪還しようとして、『〈近代の超克〉論——昭和思想史への一断思』（1980年）を書いた。竹内の絶望を引き受けるように、廣松もまた「近代知の地平の超克」（廣松渉『〈近代の超克〉論——昭和思想史への一断思』、『廣松渉著作集』第14巻、9頁）をあらためて考えたのである。

その際、廣松は竹内とは異なり、保田與重郎ではなく、京都学派の哲学的遺産それ自体と対決を行った。西田幾多郎、西谷啓治、高坂正顕、高山岩男、三木清などを取り上げながら、その核心には西田の思想があると厳しく批判したのである。

昭和十年代における三木清をも含めて、西田門下の哲学者たちが説いた“近代の超克”論、さかのぼってはそれを支えた彼らの歴史哲学や社会・国家観の大宗は、まさしく御大西田幾多郎その人の思想の裡に既在していたのである。（同、158頁）

そうすると、〈近代の超克〉を真に乗り越えるためには、その負の遺産の正体を正視しなければならない。廣松の見るところ、西田哲学は「早い時期から“主客分離”以前の相に定位するものであったし、その意味で、古典的な近代哲学の構図からは脱却する姿勢になっていたと言うことが許される」（同、181頁）が、しかし、「西田的無の原理」（同、182頁）をあまりにも早く立てすぎたために、「西洋的有の原理なるものの歴史的・社会的性格の分析を欠」（同、182頁）いてしまい、何を超克すべきかを見定めることができなかった。それに加えて、京都学派の哲学は哲学的人間学を対置していたのだが、それは決して近代を超克するものではなく、「典型的な近代イデオロギーの一形態」（同、187頁）にすぎなかったのである。

六 日中を軸とした東亜の新体制

ここで廣松が持ち出したのが「日中を軸とした東亜の新体制」であった。逝去直前の1994年3月16日に朝日新聞に発表した「東北アジアが歴史の主役に——日中を軸に「東亜」の新体制を」という論文がそれである。

単純にアジアの時代だと言うのではない。全世界が一体化している。しかし、歴史には主役もいれば脇役もいる。将来はいざ知らず、近い未来には、東北アジアが主役をつとめざるをえないのではないか。

アメリカが、ドルのタレ流しと裏腹に世界のアブソーバー（需要吸収者）としての役を演じる時代は去りつつある。日本経済は軸足をアジアにかけざるをえない。

東亜共栄圏の思想はかつては右翼の専売特許であった。日本の帝国主義はそのままにして、欧米との対立のみが強調された。だが、今では歴史の舞台が大きく回転している。

日中を軸とした東亜の新体制を！それを前梯にした世界の新秩序を！これが今では、日本資本主義そのものの抜本的な問い直しを含むかたちで、反体制左翼のスローガンになってもよい時期であろう。（廣松渉「東北アジアが歴史の主役に——日中を軸に「東亜」の新体制を」、『廣松渉著作集』第14巻、499頁）

ここでも廣松は、「東亜共栄圏の思想」を「日本資本主義そのものの抜本的な問い直しを含むかたちで、反体制左翼のスローガン」とする必要を述べている³。

この廣松の主張は、「センセーションを呼び、誤解、反発、戸惑いを招いた」（同、527頁）。しかし、事柄の真相は、おそらく今村仁司（1942～2007年）が次のように指摘するものであったのであろう。

3 この原稿の第一稿には、次のように記されている。「日中を軸とした東亜の新体制を！それを前梯にした世界の新秩序を！これはかつて日本帝国主義をそのままにして右翼思想家の唱えたスローガンであるが、今では、日本資本主義そのものの抜本的な問い直しを含むかたちで、これが左翼のスローガンになってよい時期だと思う」（小林昌人「解題」、『廣松渉著作集』第14巻、527～528頁）。ここに明らかに、廣松は「東亜共栄圏の思想」を換骨奪胎して「東亜の新体制」を構想しようとしていた。

「近代の超克」論を右翼から取り戻すべく廣松が『＜近代の超克＞論』を書いたように、東亜共栄圏の着想も右翼から左翼に取り戻すべきだと本気で確信していたところが、まさに壮士廣松にふさわしい態度である。ベクトルを変えただけで、中味は同じではないかと批判するむきもあろう。しかしかつてマルクスがフランスのブルジョワ歴史学者たちから「階級闘争」の着想を左翼的に奪い取った故知に学んで、廣松が東アジアの連帯のために「共栄圏」構想を逆手にとって論じてもしも不思議ではない。廣松がこの文章を書いて「右旋回」したという印象をもつひとが意外に多いのだが、それは誤解と言うべきである。（今村仁司「解説」、『廣松渉著作集』第14巻、511頁）

七 複数の多様なアジア的連帯としての Asia-ing(s)

では、廣松の言う「東亜の新体制」が「東亜共栄圏」の「ベクトルを変えただけ」ではないゆえんは何であるのだろうか。その鍵は二つあると思われる。一つは、「日本資本主義そのものの抜本的な問い直し」であり、もう一つはこの「東亜の新体制」が「新しい世界観や価値観」に基づくことである。廣松は、「新しい世界観や価値観は結局のところアジアから生まれ、それが世界を席卷することになるだろう」、「それはヨーロッパの、否、大乘仏教の一部など極く少数の例外を除いて、これまで主流であった「実体主義」に代わって「関係主義」が基調になることである」と述べている（廣松渉「東北アジアが歴史の主役に——日中を軸に「東亜」の新体制を」、『廣松渉著作集』第14巻、498頁）。

ここでも実態としてのアジアではなく、関係としてのアジアが問題になっている。ただ、注意したいのは、実体に先立つ関係という構え自体が京都学派のものであったということだ。「壮士廣松」もまた、ややミイラ取りがミイラになる危険性を抱えていたのである。

そうではなく、複数の形態を取ったアジア的連帯を構想し、そこでの相互浸透や相互変容を是とする社会的想像を共に作り上げるべきではないだろうか。都市間連合はその一例であるし、地域間連合もまたそうである。国民国家や主権の制約から離れて、「より高い、より広い文明観」のもと、複数の

多様なアジア的連帯を真に実現すること。これこそが、Asia-ing (s) の可能性の中心である。

参考文献

- 今村仁司「解説」、『廣松渉著作集』第14巻、岩波書店、1997年
Richard Calichman, *Takeuchi Yoshimi: Displacing the West*, Ithaca, N.Y.: Cornell University East Asia Program, 2004
黒川みどり・山田智『評伝 竹内好——その思想と生涯』、有志舎、2020年
小林昌人「解題」、『廣松渉著作集』第14巻、岩波書店、1997年
孫歌『アジアを語ることのジレンマ』、岩波書店、2002年
孫歌『竹内好という問い』、岩波書店、2005年
竹内好『竹内好全集』第5巻、筑摩書房、1981年
竹内好『竹内好全集』第8巻、筑摩書房、1980年
竹内好『竹内好全集』第9巻、筑摩書房、1981年
廣松渉『〈近代の超克〉論——昭和思想史への一断思』、『廣松渉著作集』第14巻、岩波書店、1997年
廣松渉「東北アジアが歴史の主役に——日中を軸に「東亜」の新体制を」、『廣松渉著作集』第14巻、1997年
丸川哲史『竹内好——アジアとの出会い』、河出書房新社、2010年

質疑応答

上田 近代の超克論の性質をどう掴むか、大変難しいところがあります。英語で書く場合、海外の読者に分かってもらえるように書いてはみるけれど、いつも失敗してしまう。近代の超克論をより普遍的に語るために、中島先生の考えをうかがいたいです。

中島 アメリカの日本研究者ハリー・ハルトゥーニアンの *Overcome by Modernity*（邦訳『近代による超克——戦間期日本の歴史・文化・共同体』上下二冊、梅森直之訳、岩波書店、二〇〇七年）という書籍があります。そこで議論されているように、あの座談会では、近代を超克した（Overcoming Modernity）のではなく、近代に超克された、打ち負かさ

れた (Overcome by Modernity) わけです。結局はポストモダンではなく、近代化のいろいろなプロセスの一つの姿にすぎなかった。これがハルトゥーニアンの見立てですが、私もそうだろうという気がします。近代を超克するといいながら、近代の枠組みを超えることができなかった。逆に、京都学派は、それを補強してしまった。竹内好にしても、廣松渉にしても、その京都学派の影響をどっぷり受けていたのですが、竹内はその後、自分をそこから引き離していく努力をして『近代の超克』（筑摩書房、一九八三年）を書きました。また、廣松は明示的に京都学派の枠組みを批判し、その上で、やはり『〈近代の超克〉論』（朝日出版、一九八〇年）を書きました。こうして彼らは、近代の先というものを戦後初めて見る事ができたのだと思います。ただ、私の読解ではやはり、二人とも不十分であったと思っています。21世紀になってようやく近代化のプロセスそれ自体が本格的に見直されて、新たな議論のフェーズに入ってきたのかなと思っています。

上田 「東京学派」の系譜では、近代の超克論に類する議論があったのでしょうか。丸山眞男や大塚久雄などは、近代化と主体形成を真正面から論じていました。

中島 丸山も大塚もまさに近代主義者ですから、近代を乗り越えることはできませんでしたし、逆にいわゆる「倫理的近代」を推進したのだと思います。その点、京都学派の方が、近代化という問題に対していろいろな距離を取ろうとはしていたのです。たとえ、それが失敗に終わったとしてもです。これを戦後、きちんと批判し、総決算して、日本型フランクフルト学派みたいなものが出てればよかったのですが、それが目に見える形では出て来ませんでした。それでも、戦後の東京学派の人たちは、このことをすごく意識していたわけです。廣松もそうですが、大森荘蔵や坂部恵あたりが、格闘していくわけです。とはいえ、十分ではなかったのでしょうか。その一方で、京都学派がいつの間にか復興して「新京都学派」などといわれて、世界を席卷してしまいました。この状況は少し具合が悪いというか、ややねじれた構造になってきていますね。私は、突破口は、欧米の哲学をやっている人からではなく、アジアの哲学をやっている人、アジアのテキスト

をしっかり読める人からしか生まれてこないのではないかと思います。これに尽きます。

上田 この点に関連して、報告のなかでは「大東亜共栄圏」というテーマが出ていました。現代のアジア研究者が「主体形成としてのアジア」を考えるうえでも、このような「影」を素通りすることはできません。でも、どのように内包していけばよいのでしょうか。とりわけ大東亜共栄圏政策の落とし子ともいえる東文研では、どのような議論が蓄積されてきたのでしょうか。ぜひ知りたいところです。

中島 実は、これもそれほど議論できていなかったと思います。例えば、三木清の協働主義や東亜協同体の思想については、もっと議論をしなければならなかった。三木の議論は少し複雑で、「二重の超克」という思想がありました。アジアは植民地化された状態であるという問題意識があり、それを日本がさらに破綻させているという、目に見える関係がある。アジアも超克しなければならないし、日本自体も超克しなければならない。三木は半分、いや三分の一ぐらいは、マルキストでしたからね。ねじれた筋道ながら、大東亜共栄圏につながるような複雑な思想的脈絡があるわけです。そこを本当は丁寧に議論しなければならないのに、戦後は的を射ていない研究に終始していました。問題構成に対する記憶が途絶しているわけです。三木は戦後しばらく牢屋に放置されて、誰も助けに行かず、死んでしまったでしょう。それが、私は非常に象徴的だと思いますね。日本の哲学は、そうした大失敗から戦後をはじめている。本当は三木を救出して、もう一回語り直さなければならなかったのです。

園田 東文研についていえば、戦後復興期の第三代所長（1946～1947年）が戸田貞三さんでした。戸田さんは、日本でほぼ最初の実証的な社会学をてがけた人です。彼によって、日本の社会学はデータを使って日本を語るようになりました。たしかに、彼は日本の家族構成を実証的に語った。しかし、それでは近代を語ったことにならない。この差異が重要な問題です。私も中島さんに同意で、日本では近代を十分に語ってこなかった。一方には、思想としてアジアを語る人たちの次元があり、もう一方には、いろいろな理論を西洋から持ってきて日本社会の実態はどう違うかと議論する、

実証的で具体的な次元がある。こうした地べたを這いつくばるような戦略から、一応は理論を作ろうとするけれど、それで果たして近代を語ったことになるのか？私の感覚では、気持ちのいい棲み分けをしていたのではないかと思います。鈴木榮太郎も日本のイエ・ムラの構造を明らかにして、それが近代化を制約していたという考え方をするけれど、それはもう完全に西洋的な近代化のあり方を前提として受け入れているわけです。それで結果的に、「普遍的な西洋 vs. 特殊な日本」といった枠組みで仕事をしてしまう。日本の社会学は、アジアや近代をめぐる議論を、自分たちの関係のないところに意図的に追いやってきた。戸田さんも、道徳や家族の道とかいろいろ語るわけですが、近代やアジアをめぐる問いは、慎重にオミットされていた気がします。

タンシンマンコン これは私もこれまでずっと気になった点です。東文研は一九四一年に設立されて、創立五十周年記念日とかいろいろあるけれど、これは何の記念なのかと。タイ人として、東文研の一員として、整理が難しいところがあります。大東亜共栄圏と東文研の関係は負の遺産として捉えるべきなのか、わからないのです。

中島 負の遺産として捉えて、まったく構わないと思っています。つまり、どういう意味での負の遺産なのかをちゃんと議論したらいいわけです。それを遂行していないので、負の遺産にすらなっていないのが現状です。歴史的なことは明らかになっても、その思想的な意味を探究して考えなければならぬのです。2010年に東文研の英語名称を Institute of Oriental Studies から Institute for Advanced Studies on Asia に変えたでしょう。でも、日本語名称は「東洋文化研究所」のままになりました。私は当時は、東文研の構成員ではないので、議論のあり方を承知していませんが、このねじれがあるということは、その時の教授会の議論もどこか不徹底に終わったのだと推察しています。

園田 そうか、その時の経験を知るのは私しかないわけですか。単純な話です。何が単純かというと、日本語名詞を変えると、組織は改組しなければならぬ。つまり東文研を一旦消滅させないといけなくなります。ところが、教授会メンバーには、そこまでやる気はない。文科省は、英語名称

の変更については許認可の範囲外だから勝手にやってもよろしいとの判断でしたから、英語名称のみ変えたのです。「東洋 (Oriental)」も歴史的には意味がありますが、いまは本当に使いにくいですね。

渡邊 私のフィールドは北アフリカですが、IASA (Institute for Advanced Studies on Asia) といっても、なぜアジア研究で北アフリカをやっているのかと疑問を持たれる。だから、日本語でいうアジアは Orient のニュアンスに近いので、オリエント世界を研究している場所ですと伝えるようにしています。私個人としても、大東亜共栄圏の負の遺産も含めて、やっぱり引き受けていくのが研究者として必要ではないかと思います。先ほど中島先生からお話があった竹内の「方法としてのアジア」についてですが、私はフランツ・ファノンの「アフリカ革命」を思い起こしながら聞いていました。ファノンにおいても、まさに主体形成としてのアフリカが問われていたのです。その主体形成の過程を彼は「革命」と捉えていたわけです。ただ、竹内との違いというのが、ファロンは近代的な現実をすごく実態的に捉えていました。それは、植民地支配であり、彼はマルティニークの出身ですけれど、かつて奴隷貿易によってアフリカ人が連れてこられたという歴史であります。ファノン自身は精神科医であり、黒人でありながら白人と同じような価値観を内面化していて、そのことに心の中のジレンマや葛藤を覚えていた。すごく具体的な生きられた経験をしているのです。だからこそ、彼の議論は魅力的でした。これに対し、日本の論者にとって「近代」を「超克」しなければいけないとは、どういうことなのか。「近代」とは政治支配なのか、資本主義なのか、科学的人種主義なのかと、「超克」の対象をもう少し具体的に提起しなければいけないのではないかと思います。

中島 やはり京都学派の近代化の議論はかなり抽象的です。植民地の問題が具体的にきちんと入ってくることがなかなかない。竹内は魯迅の研究者でした。魯迅という人は複雑怪奇な歴史を生きた人です。彼は中国における植民地化の危機というものを背負っていた。竹内もその魯迅を翻訳したり紹介したりすることで、抑圧された者、声を奪われた人たちへの具体的な手触りやイメージを掴んでいったわけです。竹内も矛盾だらけなのだけ

れども、これが竹内を他の人たちから区別するものだと思うわけです。

園田 もう一つだけ質問させてください。中島さんの発表では最後のところで「相互浸透や相互変容を是とする社会的想像を共に作り上げる」とありましたが、その主体と動機というのは、具体的にどんなものなのでしょう？

中島 韓国の白永瑞さんがいつも主張していることですが、アジアには「核心現場」、つまり近代の矛盾が凝縮した場所がたくさんあるわけです。日本では例えば沖縄とかですよね。沖縄と本土の関係はねじれにねじれているじゃないですか。沖縄が本土復帰する時、沖縄の人たちは対等な連帯を求めているわけですが、そういうものは生じなかった。その矛盾は現在まで続いているわけです。だから、そういう真の連帯を求める機運が核心現場同士にはあるわけです。今では沖縄は、台湾や濟州島との間で直接的な連帯をはじめているでしょう。福島もそうです。核心現場の間の連帯というものが、主権や国家という近代の枠組みを変えていく。アジアの地域や現場との間で連帯を起こしていくこと、私はそれしかないと思っています。

一 古典理論から圧縮近代化論まで

本稿では近代化論 (modernization theories) の観点からアジアの位置付け、行く末を考えてみたい。近代化論は、社会学の成立とともに生まれた。マルクスは資本主義を、デュルケムは社会的分業を、ヴェーバーは官僚制的合理化を、それぞれ近代化の中心原理として捉えた。これらの古典理論は近代化の副作用も同時に予告していた。マルクスの「疎外」、デュルケムの「アノミ」、ヴェーバーの「鉄の檻」は、近代化が人間を解放するだけでなく、生活世界を不安定化させ、意味を奪い、自己破壊的な帰結をもたらすことを示していた。

二〇世紀に入ると、近代化論はパーソンズによって体系化された。パーソンズは、社会を市場、国家、法・市民社会、文化・宗教といった機能領域の分化として捉え、近代化を社会システムの構造的分化として説明した。この理論は、非西洋社会を含む比較研究への道を開いたが、同時に「近代化するほど社会は類似する」という収斂的な見方を前提としていた。さらに重要なことであるが、パーソンズ理論は社会の秩序を前提としており、近代化が生み出す貧困、環境リスク、健康リスク、核リスク、家族の不安定化といった自己破壊的副作用を十分に理論化できずにいた。

この限界を批判的に乗り越えようとしたのが、一九八〇年代以降の再帰的近代化論 (theories of reflexive modernization) である。再帰的近代化論は、ポストモダンティではなく、「われわれは、モダンティの彼方に移行したのではなく、モダンティが徹底化した局面を、まさに生きている」ことを認める。そして「発達が自己破壊に転化する可能性があり、またその自己破壊のなかで、ひとつの近代化が別の近代化をむしろ、変化させていくような新たな

段階」として現代を解釈する認識枠組みであった⁴。

近代化の循環的作用を重視する再帰的近代化論の立場からすれば、近代化の速度や論理、その帰結が地域によって異なることが分析の射程に入ってくることは至極当然である。ベックも、当初の西洋主義的近代化観に対する自己批判を経て、再帰的近代化の複数性 (varieties) を明確に重視するようになっていった⁵。そして、こうした近代化論のパラダイム転換の最中に、現実として急成長を遂げていたアジアが、理論的にも重要な位置を占めるようになったのである。

この議論を先取りしたのは、韓国の社会学者張慶燮 (チャン・キョンスプ) である。植民地支配 (一九一〇～四五年)、朝鮮戦争 (五〇～五三年)、冷戦下の開発独裁と国家主導工業化 (六〇～八〇年代)、八七年以降の民主化、九七年のアジア通貨危機、二〇〇〇年代以降の新自由主義的再編を経験した韓国では、近代化は遅れてはじまり、異常な速度で進展したという現実があった。西洋のように何世代もかけて前近代から近代、再帰的近代を段階的に経験するのではなく、一人の人生のなかで重層的に経験される。張慶燮はこれを「圧縮近代 (compressed modernity)」の経験と捉えた。

圧縮近代は、経済・政治・社会・文化的変化が、時間と空間の双方において極端に凝縮した様式で起こり、相互に異なる歴史的・社会的要素のダイナミックな共存が高度に複雑で流動的な社会システムの構築や再構築につながる文明的状況である⁶。

張慶燮自身も多くを負っているように、こうした問題意識は韓国社会学の一つの系譜であるポストコロニアル理論とも共通している。ポストコロニア

4 アンソニー・ギデンズ『近代とはいかなる時代か?』而立書房、一九九三年、七〇頁。ウルリッヒ・ベック「政治の再創造」『再帰的近代化』而立書房、一九九七年、一二頁。ただし、両者の「再帰性」概念には重要な差異がある。ナチスとフランクフルト学派という歴史・理論的負荷を背負うベックは、近代的理性に対する根源的不信があり、「再帰性」とは第一義的に、無意識的で想定外の副作用 (チェルノブイリなど) である。一方、ギデンズの「再帰性」は構造と行為の媒介原理であり、したがって構造を変革するパワー (権力) という積極的意味を帯びている。

5 Beck, U. & Grande, E. Varieties of second modernity, 2010.

6 Chang, K.S. Compressed Modernity in South Korea, p. 33, 2016.

ル理論が政治体制や経済構造に焦点化するのに対して、張慶燮自身はその分析射程を、日常生活、家族やジェンダー、リスクや不安に拡張する。

「個人主義なき個人化」のテーゼはその代表であろう。圧縮近代社会では、雇用が不安定化し、福祉国家は未成熟なまま、リスクは急激に増大する。本来は制度が担うべきリスク管理・ケア・再生産機能が個人や家族へ過剰委譲される。西洋のような自己決定の思想は成熟せず、自己選択はただ強制される。「個人主義なき個人化」の構造的帰結は、極端な低出生率、高い非婚率、高齢者の高い相対的貧困率、若年層の生活不安など、いくつかの社会指標でも具体的に捕捉することができる⁷。

「個人主義なき個人化」は韓国のみならず、日本や台湾も含む東アジア的現象でもある。また、同じくポストコロニアル経験を共有する東南アジア（マレーシア、ベトナム、インドネシアなど）でも共感を生み、家族社会学や食の社会学など、特に日常生活に近接する領域において圧縮近代化論は積極的に受容されてきた。

二 日本の「半圧縮近代化」

マルクスにとって、アジアは前資本主義的段階の「アジア的共同体」であり、デュルケムやヴェーバーにしても、日本の近代化は「西洋の衝撃」によるもので、内発的発展ではなかった。日本の近代化論はこうした古典理論の空隙からはじまった。「西洋の衝撃」があったとはいえ、日本の近代化は西洋とは異なり、他のアジアとも異なる。戦後の経済成長を経て、日本は西洋に匹敵・凌駕するほどの近代化を成し遂げた。日本の近代化論は、その発端からして、近代化の複数性を探求する知的営みであった（はずである）。

おそらく最初に明白な形をとった近代化論争は、一九二〇年代後半の日本資本主義論争であろう。戦後には、農地改革や日本資本主義の性格をめぐる議論が再燃し、大塚久雄や丸山眞男に代表されるように、近代的主体の形成不全が中心問題となった。大塚は資本主義を内面から支える主体倫理の不在（家・村・組織などの共同体構造による阻害）、丸山は責任ある政治主体

7 Chang, K.S. *The Risk of Compressed Modernity*, 2025.

の不在（無責任の体系）を問題化した。

しかし、高度経済成長が始まると、近代化は克服すべき課題ではなく、すでに達成されつつある前提へと変わった。アメリカ型近代化論が受容され、パーソンズを継承した富永健一は、日本にも西洋のプロテスタンティズムに機能等価な倫理規範が存在したと論じた。すなわち、戦前の天皇信仰や戦後の企業忠誠心は、近代化を阻害する封建的残滓ではなく、日本型近代化を支える規範的基盤として再解釈されたのである⁸。

経済学では、ロストウなどの経済成長論が広く受容された。しかし、その単線的近代化観は日本の実態を説明できておらず、時間（非線形・圧縮性）、空間（交易圏・地域秩序）、歴史（帝国・植民地遺産）の観点から修正的解釈が生まれていく。大川一司は、日本の経済成長が西洋に比べて圧縮的であり、アジア地域ではさらに圧縮的に起こりうることを指摘した。渡辺利夫も韓国の経済成長を、日本の圧縮成長の「強化された再現」と捉えた⁹。

さらに、濱下武志、川勝平太、杉原薫らは、東アジアの近代化を西洋から

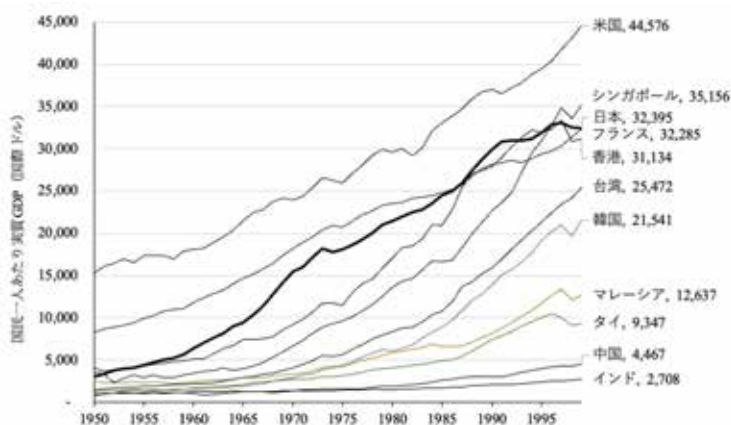


図1 国民1人あたりの実質 GDP (1950～1999)

出典) Maddison project data, 2020 より作成

8 富永健一『近代化の理論』講談社、一九九六年。富永健一『マックス・ヴェーバーとアジアの近代化』講談社、一九九八年。

9 大川一司『経済発展と日本の経験』大明堂、一九七六年。渡辺利夫『現代韓国経済分析』勁草書房、一九八二年。

の一方的衝撃としてではなく、アジア交易圏や労働集約的發展経路の再編として捉え直した。杉原薫は、西洋の資本集約的發展とは異なる、東アジアの労働集約的・資源節約的發展経路を明らかにし、それが近代世界システムのなかで西洋型経路と接合していく過程を克明に描いた¹⁰。

このように、日本の近代化論は、日本および東アジアの経済成長の独自性を説明するうえで大きな成果をあげてきた。しかし、その多くはなお「第一の近代」の理論にとどまっていた。すなわち、資本主義化、工業化、国家形成、経済成長をいかに説明するかに主眼があり、その成功が生み出した副作用（農業の周縁化、エネルギー・環境問題、新たな貧困、ケアの個人化、生活世界の不安定化など）を十分に理論化していなかった。

もっとも、日本において再帰的近代化に対応した理論形成が全くなかったわけではない。その代表例が家族社会学である。家族社会学において近代化とは、近代家族（modern family）の成立とその後の展開を意味した。近代家族とは、家内領域と公共領域の分離、情緒関係の重視、子ども中心主義、性別分業、核家族化などを特徴とする家族モデルである。

西洋では、一九世紀の中産階級で成立した近代家族が、二〇世紀には労働者階級にも普及していった。他方、日本ではその成立がやや遅れ、都市中間層に萌芽した近代家族が、全国的に普及するのは戦後高度成長期であった。落合恵美子はこれを「家族の戦後体制」と呼び、それが人口ボーナス、再生産主義、女性の主婦化によって支えられていたと論じた。

この議論の背景には人口転換理論がある。多産多死から少産少死への移行、すなわち第一次人口転換は、近代家族成立の人口学的条件であった。しかし一九七〇年代以降、西洋諸国では出生率が人口置換水準を下回り、離婚率上昇、未婚化、個人化が進行する「第二次人口転換」が始まった。これは近代家族の動揺を意味していた。

日本でも七〇年代半ば以降、第二の出生率低下が始まり、少子化、未婚化、単身世帯化が進行した。しかし、日本では「家族の戦後体制」が安定形成されていたために、家族政策やジェンダー秩序の転換が十分に進まなかった。

10 杉原薫『世界史のなかの東アジアの奇跡』名古屋大学出版会、二〇二〇年。

先進国のなかでも最悪水準の女性の貧困、ジェンダー格差、ケア負担の家族化などは、その典型的帰結である。他のアジア地域では家族構造の近代化も急激であり、日本のような「家族の戦後体制」は成熟しなかった。落合は、こうした日本の特異的な位置を、西洋と東アジアの間にある「半圧縮近代」(semi-compressed modernity) と特徴づけたのであった。

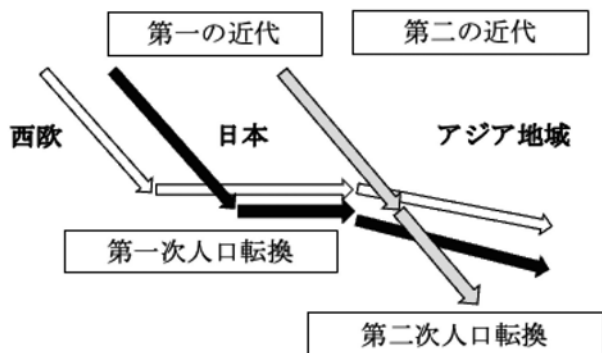


図2 家族社会学からみた日本の「半圧縮近代」
出典) 落合恵美子『親密圏と公共圏の社会学』勁草書房、
二〇二三年をもとに作成

三 食からみたアジアの圧縮近代

家族社会学と並んで、実証研究が展開されているのが食の社会学である。食の社会学は、1970年代のフランスで形成された新たな学問である。デュルケム（社会的事実、アノミ論）やブルデュー（再生産論）を擁するフランス独特の知的風土が、再生産よりも変容過程（近代化）に着目させ、とりわけ規範の崩壊局面が激化しているアジアの「食の圧縮近代（compressed food modernity）」に対する分析視点を切り拓いたのであった。

食の社会学では、食の近代化を規範の脱構築と再構築の不断のプロセスと捉える。これを駆動するのが「ガストロアノミ（gastro-anomy）」と呼ばれる状態である。これは単なる食規範の欠如ではない。むしろ、健康、美食、環境、ダイエットなど無数の食規範が氾濫した結果、「何を食べるべきかわからない」という存在論的不安に陥る状態を意味する。豊かな社会ほど選択肢は増

大するが、その反面、食の自己責任化も進行する。しかも、その不安は社会階層によって不均等に分配される。そのため、近代社会では、家族（親密圏）、国家（公共圏）、科学（栄養学・環境学）、自然といった多様な統御様式によって、食規範を再構築しようとする動きが生まれる。しかし、特定の規範が過剰に支配的になれば、かえってガストロノミを増幅させる危険もある。重要なのは、複数の規範のあいだを往還しながら、自らの食行為を調整していく「再帰的な食潜在能力（reflexive food capability）」の開発である。

アジアの食の圧縮近代の矛盾が表出する具体例を二つあげよう。一つは「崩食」すなわち欠食、外食、孤食、早食い、食事の遅延、献立の簡素化など、近代家族的な価値観やフードシステムの構造の変容とも密接に結びついた現象である。西洋では実証研究から「比較的 modest」と診断されているが、東アジアの様相は異なる。台湾では外食が常態化して（夕食でも週四回程度）家族料理規範は薄れており、韓国では五割以上の人々が「一日三食」規範を持っておらず、食規範の弛緩とそれに付随する実践の変化が著しい。日本では、規範が「家族の戦後体制」に強固に制約されているため、規範と実践の乖離が相対的に拡大している。こうした諸変化は、食べ手の健康やウェルビーイングに複雑な影響を及ぼしている¹¹。

もう一つは「タンパク質転換」すなわち動物性食品から植物性食品への移行をめぐる問題である。国際的には、現行の食生活（特に畜産物消費）を続ければプラネタリー・バウンダリーを侵犯することが認知されるようになり、「健康も地球も壊さない」程度の消費量基準も設けられるようになった。西洋の肉類消費量は依然として大きいとはいえ、一九八〇年代にはピークに達し「タンパク質転換」をすでに深めつつある。一方、東アジアは「非牧畜社会の食文化」（石毛直道）と特徴づけられてきたが、実際には肉類消費量を急速に拡大しており、台湾や韓国はすでに西ヨーロッパを凌駕する「肉食大国」となり、中国は世界の六割の豚を飼養している。「タンパク質転換」はアジアにこそ重要な問題であるにもかかわらず、政策や規範の転換は起こっ

11 Ueda, H. & Chiu, Y.C. The de-structuration of eating models in East Asia under compressed food modernity: An empirical synthesis, 2024.

ておらず、規範と実践の乖離はますます大きくなっている¹²。

四 さいごに——Global Asian Study の再出発に宛てて

圧縮近代化論の理論形成と実証研究は現在進行形であり、まだ最終判断を下せる段階ではない。本稿ではそれが、西洋の近代化理論を克服する新たな理論的挑戦として描いてきたが（筆者もそうした可能性に賭ける一人であるが）、こうしたナラティブは西洋の学界ではまだまだ十分に受容されていない¹³。しかし、韓国、日本、台湾、マレーシア、ベトナム、インドネシアなど、少なくともアジアの研究者には「自己を語る」「規範を再構築する」ための方法として、共感と連帯を生んでいることは事実である。

たしかに、圧縮近代化論が「内なるオリエンタリズム」とも危うい関係にあることは否めない。これは筆者自身の研究過程でも痛感している側面であり¹⁴、そうした緊張関係は常に自覚しておく方がより健全でもある。少なくとも有意義な方向性の一つは、圧縮近代化論を通じてアジアの優位性や独自性を語るのではなく「アジアの弱さ（脆弱性）を普遍的に語る」努力をすることであろう。新たな貧困、超高齢化社会、最低水準の低出生率、福島原発など、圧縮近代を生きるアジアは課題先進国でもあり、そうした課題に率先して取り組むことで、世界に解決のアイデアやヒントを供給し続ける役割を果たしたい。

アジア諸地域の圧縮近代化の論理・過程・帰結を分析し、その知見を普遍化していくこと——これを Global Asian Study の研究プログラムに加えてみるのはいかがだろうか。具体的な進め方は次の通りである。第一に、各地域・各分野でいかなる「近代化の副作用」が生じているかを整理すること。第二に、そうした副作用の分析あるいは解決方法においてアジアのいかなるローカル

12 Ueda, H. Protein transition and its sociological interpretation, 2026.

13 例外として、Rouleau-Berger, L. & Li, P.(eds.) Handbook of Post-Western Sociology, 2022。

14 第一に、圧縮近代化論は西洋対アジアの差異の説明には効果的であるが、アジア内部の差異を語りづらいという弱点がある。日本の「半圧縮近代」論はその克服形態の一つではあったが、では「半-半圧縮近代」が存在するのか、グレデーション的にアジア地域を並べて分析することができるかなど諸問題がある。第二に、現状の圧縮近代化論は主にアジアで受容されており、同じく圧縮した近代化を遂げている南アメリカやアフリカなどの非西洋・非アジア地域との対話がもっと開かれなければならない。「アジア＝圧縮近代」の構図をいかに打ち破れるだろうか。

な概念が動員されているか、それがいかなる論理で受容・供給されているかを整理すること¹⁵。こうして地域越境的・学際的な「普遍化可能な概念マップ」を作ってアジアと世界の対話を促すこと。Global Asian Study は「アジア研究とは何か／アジアをどう語るか」を考え続ける知の統合拠点でありたい。

こうした狭義の研究プログラムとは別に、Global Asian Study には、教育・研究者交流・産官学連携の諸プログラム運営という、もう一つの側面があった。たしかに「完成物としての近代化論 (modernization as theory)」には直接的な影響をみることができないが、決して無関係ではない。これから再帰的近代を生きていくアジアの若者や各領域のエージェントを育て、彼らとともに来たる近代を作っていく——そうした「近代化論の作り方 (modernization as theory-making)」という重要な意味を担っているのではないだろうか¹⁶。

参考文献

- アンソニー・ギデンズ『近代とはいかなる時代か?』而立書房、一九九三年
ウルリッヒ・ベック「政治の再創造」『再帰的近代化』而立書房、一九九七年
富永健一『近代化の理論』講談社、一九九六年
富永健一『マックス・ヴェーバーとアジアの近代化』講談社、一九九八年
大川一司『経済発展と日本の経験』大明堂、一九七六年
渡辺利夫『現代韓国経済分析』勁草書房、一九八二年
杉原薫『世界史のなかの東アジアの奇跡』名古屋大学出版会、二〇二〇年
落合恵美子『親密圏と公共圏の社会学』勁草書房、二〇二三年
Beck, U. & Grande, E. Varieties of second modernity, *British Journal of Sociology*, 61(3), 409-443, 2010.

15 例えば、日本食文化領域では Washoku, Fūdo, Zen, Chanoyu, Umami, Shokuiku, Satoyama, Teikei, Omotenashi, Mottainai, Chisan-chishō, Eiyō などの概念が海外研究者に驚きをもって受容されている。

16 こうした示唆はこれまで GAS を率いてきた園田茂人先生のアジア研究者としての生き様を通じて得た教訓である。園田茂人「社会学教育を通じて日本とアジアを繋ぐ」東文研第六回定例研究会（最終研究発表会）、三月一九日。

- Chang, K.S. Compressed Modernity in South Korea. In Y. Kim (ed.) *Routledge Handbook of Korean Culture and Society*, p. 31-47, 2016.
- Chang, K.S. *The Risk of Compressed Modernity*, Polity, 2025.
- Ueda, H. & Chiu, Y.C. The de-structuration of eating models in East Asia under compressed food modernity: An empirical synthesis, *Appetite*, 203, 2024.
- Ueda, H. Protein transition and its sociological interpretation, *Food Ethics*, 11(2), 2026.
- Rouleau-Berger, L. & Li, P. (eds.) *Handbook of Post-Western Sociology*, Brill, 2022.

質疑応答

キム 上田さんの世界観がみえる発表でした。ありがとうございました。私からは二つ質問がありまして、一つは上田さんのいう「普遍的」というのはどういうことか。もう一つは、韓国では reflexive modernity を「省察的近代化」と翻訳しますが、日本で再帰的近代化と翻訳するとどのようにニュアンスが変わってくるのかということです。

上田 まず普遍についてですが、中島先生の発表にもあった「主体形成」というイメージに近い気がします。あるいは、フランソワ・ジュリアンさんや中島先生が別のところで論じている「普遍化すること (l'universalisant)」という現在分詞形の普遍。普遍的なものを、自身も他者もともに折り曲がれながら、創造していくプロセスという捉え方にも強い影響を受けています。私自身、日本にあまり友達がなくて……フランスやアジアの同僚とばかり一緒に研究をしてきたわけですが、常に日本をどう語るかということが問われる環境なのですね。日本やアジアの経験をより普遍的に語ることが求められるなかで、失敗しながらそれでも努力していく、そうした試行錯誤のプロセスとして「普遍」という言葉を用いています。それで「再帰的近代化」についてですが、これは日本語も適訳ではないように思います。そもそも、代表的論者と知られるベックとギデンズにしても、同じ「再帰性」の言葉を使いながら、全然異なる意味ですよ。

ベックは自ら「新たな批判理論」と言うように、やはりフランクフルト学派の系譜をしっかりと引き受けながら再帰的近代を語っている。ヨーロッパの近代化がナチズムを導いたという経験からして、近代的理性というものをはなから信用していない。そういうところから近代化を語るから、近代化とはそもそも人間の省察や理性を超えたものである、副作用は予測不可能に生じてくるという立場をとる。そういうペシミズムはある意味で、ヴェーバーの近代化論に近いです。「鉄の檻」ではなく「リスクの檻」といいましょうか。一方、ギデンズにとっての再帰性とは日常行為に埋め込まれたものであって、行為を制約する構造を変革できるパワー（権力）という非常にポジティブな意味も背負わされているわけですね。どうも日本ではこのあたりがあまり区別されずに「再帰的近代化」が一面的に論じられているように思います。

キム わかりました。

上田 ついでだから、もう一言。食の社会学において極めて重要な位置を占めるブルデューも再帰性を論じていますが、本来はギデンズと同じように、ブルデューのハビトゥス論も、近代化論の枠組みで捉え直していくことができるわけですね。でも、フランスの学界では大っぴらに「近代化」を論じることはあまりない。ラトゥールが「我々は決して近代ではなかった (Nous n'avons jamais été modernes)」なんて言い切っているぐらいですから。フランスで近代化論をやっている人はある種のリスクをとりながらやっているわけです。同僚のジャン＝ピーエル・プーラン先生や、「ポスト西洋社会学」を提案しているローレンス・ルーロバーガーさんにせよ、いずれも中国やアジアのフィールドにどっぷり浸かったフランス人社会学者です。そうでなければ、なかなか近代化論を張れないわけですね。

田中 中国思想では、味覚と音、食と音楽は並列で語られることが多いです。やはり音楽史の場合も、どのような音楽が新しい規範となるのか、その時に伝統的要素がどの程度強く出てくるのか、ということは重要になってくるわけです。食の近代化論の場合はこうした「伝統」についてどう規定して考えているのでしょうか。そもそも、近代化論者はしっかり「伝統」をみることができていないのではとも思うのです。例えば音楽史では田辺尚雄

という著名な研究者がいますが、彼もどこか内なるオリエンタリズム的なところがあって、田邊が整理した「伝統」については誰も批判をしてこなかったわけです。

上田 食の近代化論では二つの異なる局面で「伝統」が出てきます。一つは、近代化の特質を規定する際に、対比軸として伝統的社会というものを持ってくる。ただし、田中先生がおっしゃるように、やはり単純化・矮小化される側面は否めません。もう一つは、近代化が起こっていくと、どこかで行き詰まってくる。その時に、再び「伝統」が顔を出します。地域や家庭の食文化の伝統が、あたかも正統な食規範の根拠であるかのように持ち出されるわけです。ただし、ここでも都合のよいように解釈された「伝統」なわけで、ある種の単純化が起きているわけです。一つ、興味深い具体例を挙げましょう。ふつう近代科学というと西洋から日本・アジアに輸入されていくわけですが、ことに近代栄養学だけは、日本で独立したディシプリンとして成立し、それが欧米やアジアなど世界へ波及していく、という大変稀有な発展プロセスをとったのです。1920年代において、栄養学の体系的な理論、国立の研究所、専門教育機関を整備していたのは日本だけであり、家庭、工場、学校、農村への栄養知識の普及度についても目を見張るものがありました。近代栄養学というと、伝統的な食知識を否定して、生理学的真理に基づく食生活の合理化とこれまで捉えられてきたわけですが、近年の研究によって全く異なる実像が浮かび上がってきたのです。つまり、日本の栄養学も一旦は西洋科学を規範としたわけですが、それが前提とする心身二元論や主客二元論に対する根本的な行き詰まりに出会ってしまった。栄養学の創始者である佐伯矩という人は、そこで蘭学、漢方、本草、さらには神道思想にみられる、壮大な循環的生命観・世界観を持ち出して、そこに包摂してはじめて、近代栄養学というディシプリンが成立し得たのです。伝統というのは再評価してみると、非常に豊かなもので、そこから近代を逆照射するという研究プログラムが、食に限らず、いろいろな分野で必要になってくるでしょう。園田先生、今までのところいかがですか。逆指名で恐縮ですが。

園田 僕の個人的な経験で言うと、ある本を書いた時、経済学者の末廣昭さ

んに言われたことがあります。「この本は誰に向かって書いたのか？」と。私は当たり前のように社会学を想定していたのだけれど、あなたが本当に読んでほしい人に届きますかと問われたのです。圧縮近代であろうと、半圧縮近代であろうと、社会学であるがゆえの前提というものがある。社会学者は、多系的な発展プロセスをみとめながらも、やはりどこかで収斂し、一般的に捉えられるといったロマンに取り憑かれている。というのも、そうのように社会学のテキストができているから。日本の社会学者は、社会学のテキストに登場しません。結局は、デュルケムやヴェーバーから社会学を学び、そこでの前提に囚われてしまっているのです。なかなか、その枠組みを超えて、地域の分析にはいかない。それをやろうとした瞬間に「あなたは地域研究者だ」とネガティブなラベリングがなされることになる。でも地域研究者の側からすると、何と誇大妄言なことを言っているのか、自分たちの社会すら十分に説明できない大きな概念を振り回して、何をやっているのかということになる。私自身は、こうした知的コミュニティにおける不協和音を生きてきたわけです。上田さんはその不協和音のなかで、どうやって自分の位置を確保しようとしているか。それを聞きたいと思います。

上田 佐藤仁先生がいつも言っていますが、東文研は各分野の「不適合者」が流れつく場所だと（笑）。私も一方で農業経済学から、他方で社会学からよけものにされて結局、東文研に流れつきました。食という対象がすごく卑近で身体的であって、人文社会科学から排除されてきた歴史があるから、それはそれで仕方ないところがあります。そうした不協和音を覚悟して、そのなかで生きていくしかないように思います。日本の社会学も富永健一先生以降、「近代化」を掲げるまとまった著作は出ていないですね。やはり近代化論には、一定の距離感があるのだと思います。

園田 おっしゃる通りです。その点、富永さんはその怖さをよくわかっていたのですね。ご自身が旧満州で育っているの、中国のことをやると、自分が学んできた社会学の理論ではもう追いつかないとわかっていた。ヴェーバーからはじめれば、中国社会の変化を説明できるかもと考えたが、おそらく中国人の社会学者からしたら何をやっているのかと思うでしょ

う。結局、中国の社会学については別の人に任せる感じになった。「君は僕の弟子だから」と変な期待はされていたが、私は先生とは違うという不協和音を抱えながら、これまで研究してきたところがあります。だから上田さんも、それぞれの知的コミュニティで期待されているスタンスや理論、概念や手法が相当ちがうということを意識して近代化論をやらなければ、ドツボにはまる可能性がある。

上田 ありがたい教訓です。また逆指名になりますが、渡邊先生にもご感想をおうかがいしたいです。本来、圧縮近代化の経験は非西洋社会全体に開かれているはずなのですが、アフリカの文脈で考えると、こうした認識枠組みに対してどういう反応があるのでしょうか。

渡邊 近代化といってもいろいろな形態があるので、それを一様に議論するのは難しい印象があります。例えば、送金方法などをとっても携帯電話でさっとできるような非常に発達した変化の早い分野がある一方で、宗教と人々との関係のように、単線的「近代化」には収まらない分野もあります。

上田 なるほど。一度、マレーシアで近代化論の研究会を開いた時、シャムスル・アムリ・バハルディーンさんという著名な人類学者にお話を聞く機会がありました。その時、シャムスルさんが言うには「圧縮近代化」は compressed juice みたいだねと（笑）。つまり、学的概念として足るものなのか、マレーシアの近代化の現実を捉え切れるのかという反応でした。かわりにシャムスルさんが提案するのは「埋め込まれた近代（embedded modernity）」という地域の個別性を重要にする見方でした。ただ、こうしたアプローチは一方で、地域間の対話の可能性の芽を摘んでしまうおそれもあるのではないかと思います。いまは圧縮近代化論がアフリカの文脈になじまないとしても、東アジアの地点以外からも考え続けていかなければならないと思います。

園田 落合恵美子さんの圧縮近代化論が魅力的なもの、あくまでも人口学的な議論を基盤にし、具体的な出生率とか婚姻率とか、比較可能な概念とデータを持っていたからだと思います。でもマレーシアの方からしたら、そうした比較指標が制御されない時点で compressed といわれても、何が compressed されているかわからないといった反応がなされるように思い

ます。

上田 そうなるとやはり富永先生の近代化論にもう一度立ち返ることも必要になってくるのではないかと思います。富永先生の仕事の重要な部分は、近代化を「社会構造の変動」と捉えて、社会構造を構成する要素を家族・親族、組織、地域社会、国家や社会階層などいくつかに分類して比較する枠組み——全てが量的指標となるわけではないとしても——を提示されていました。近代化という広大な概念の曖昧性を少し減じることができるのかもしれない。

園田 あれもパーソンズの AGIL 図式の一種の焼き直しですけどね。

上田 貴重なフィードバックをありがとうございました。

中島 むかしフランソワ・ジュリアンの翻訳をしたのですが（「外（中国）から考える」『思想』、岩波書店、一九九九年）、彼によれば *réfléchir* の古義は「繰り返して／相互に撓む」であるといいます。*reflection*（省察）も *reflexivity*（再帰性）も、語源をみると *re-flex* です。*flex* の方は曲がるという意味ですね。では、*re-* の方はどうなのかということ、繰り返しの意味であると同時に、そこにはお互いが曲がる、相互に変化するというニュアンスも含まれている。何かを反復しているのだけれども、反復が正確にはいかないのですね。しかも、そうしたプロセス自体が省察という内面的なプロセスにも組み込まれていなければならないというわけです。モダニティの広がり方を捉えるうえでも、そうしたニュアンスを取り込むと面白いのではないでしょうか。

上田 非常に面白いです。ベックは、近代化が新たな段階に入ったことを強調するために、第一の近代のパラダイムである省察と、第二の近代のパラダイムとしての再帰性を峻別するのですが、そうした概念操作によって、大事なことを見落としてしまったのかもしれない。省察と再帰性の底には、互いに共通するものがあって、それが *re-flex* の古義にある「繰り返して／相互に撓む」ということ。どう訳出するか、これから考えますが、日本でよく用いられている「再帰的近代」よりも本質を掴んだ適訳のような気がします。

中島 もうひとつ、アメリカの宗教社会学者にロバート・ベラーという人が

います。ベラーもパーソンズの近代化論の影響を強く受けていますが、それで日本に来てみたわけですか。丸山眞男に闘いを挑んだわけですが、丸山は激怒しました。日本の近代化はそんなに単純なものではない、パーソンズやヴェーバーの大きな理論はまったく意味をなさないと断じます。それで、ベラーはいろいろ考え直すわけですか。晩年ですけども、ベラーはモダニティがどれだけ複数なのかという問いを立てました。モダニティという以上は何かそこに共通するものがあるのではないかと、無限に複数あるわけではないのではないかと、と。彼は「市民宗教」といっていますが、人民主権といった思想が社会の埋め込みから解きはなれた時、倫理的な近代が訪れた。これを見出すことができなければ、やはりモダニティとは言えないという議論をするわけですか。彼は宗教社会学者であり、近世日本の宗教をよく研究していた。つまり、前近代と近代のハイブリッドとは何であったかという問題をよく考えたわけですか。これを考えることなくして、近代化の問題を考えることはできないのではないかと私も思います。

GASという企図 ——過去の省察から将来の ビジョンへ——

—— 園田 茂人

本日の会合は、今後の GAS (Global Asian Studies) という東文研の旗艦プログラムで何をしていくことになるかを議論することを目的にしていることから、理念的、理想的な議論が支配する「空中戦」が展開するものと考えられる。しかし、GAS ができるまでの経緯やその後の展開を考慮に入れないと、その提案も「絵に描いた餅」になってしまう可能性がある。

たとえば同じ東京大学の附置研究所でも、社会科学研究所（社研）はグループ研究を軸に研究費を配分している。そうした環境にあって、所としてどのような研究を推進すべきかについて議論することに意味があるし、何よりこれを実行に移す「部隊」がある。では、似た環境は東文研にもあるだろうか？ もしなければ、どんなに理想的なグループ研究を提案したとしても、全所的に研究を進めることは難しいことになる。

東洋文化研究所で GAS がスタートするのは 2022 年。それ以降に東文研に着任された方々は GAS が始まった経緯や、その前史をご存じない方も多いだろうから、まずはその共有から始めたい。

一 GAS 前史と東文研の特徴

東文研には社研に似た環境が整っているか？私の答えはノーである。その理由等については、ソウル大学のアジアセンターが主催した会議で招待講演として述べたことが、そのまま当てはまると考えている。

ソウル大学では、国際研究院（2004 年設立）でアジアの一部が研究対象とされていたのが、広くアジアを対象にした学際的な研究を進めるべく、2009 年にアジアセンターが設立された。そして今後のアジア研究を進めるための指針を得ることを目的に、世界各国からアジア研究を謳った研究機関の長を招聘し、2014 年 3 月に “New Horizons of Asian Studies : Asia

Research Directors Conference”を主催した。東文研もこの会議に招待されたが、当時所長であった大木康教授の都合が悪かったので私が代理で出席し、東文研の現状を説明する機会を得た。

そこでの報告が私の主張を凝縮しているが、そのタイトルは“IASA as a Geisha House: How we deal with Interdisciplinary Studies” (Sonoda, 2014)。東文研を「置き屋 (Geisha House)」と形容したのは、所には社研のようなグループ研究の伝統がなく、基本的に各研究者が班研究などを通じて個別の研究を行うことをメインとしてきたことを指摘してのことである。

1990年代初頭には浜下武志、宮嶋博史といった東文研の研究者が編者となり、「アジアから考える」シリーズの6巻本を東京大学出版会から刊行するといった試みもなされたが、これも全所的なプロジェクトとは言い難い。21世紀になって21世紀COEプログラムやグローバルCOEプログラムなど、文科省の競争的資金行政が盛んになっても、東文研が拠点となって学内の研究者を集め、研究・教育プログラムを主導する契機はほとんどなかったし、そうしたことを忌避する雰囲気が広がっていた。

私はこうした東文研の性格を置き屋に譬えた。置き屋にはマネジャーとしての女将がいるが、置き屋が発展するかどうかは個々の舞妓の力量＝人気度に依っており、女将のマネジメント能力に負う部分は少ない。東文研も同様で、個々の研究者のもつ研究力——あるいは研究力の高い研究者を獲得すること——こそが、所の存在感を担保している。

では、東文研の研究者が学際的な研究と無関係だったかということ、そのようなことはない。彼らは外部の研究者と連携して学際研究を進めることも多くあったが——こうした研究者に、後で紹介する猪口孝教授がいる——、これも彼らが外部の研究者から「お呼び」がかかる（招待される）か、あくまで個人のプロジェクトとして実施・運営してのことである。私の報告は、おおよそこうした内容のものだった。

もっとも、これには2つの例外がある。1つは1999年に始まり2020年に終わったASNET (Network for Education and Research on Asia: 日本・アジアに関する研究教育ネットワーク)、もう1つは2014年に始まり2022年に終わったGJS (Global Japanese Studies: 国際総合日本学) プログラ

ムで、この2つは東文研が全学を取りまとめる形で事業を進めてきた¹⁷。前者は池本幸生教授や羽田正教授、後者は中島隆博教授や私が音頭取りとなり、本部から任期付きの准教授や助教ポストを頂いて、プログラムとしての中核的な活動を進めてきたのであり、その成果は現在もオンライン上で知ることができる¹⁸。

ところがこの2つのプログラムは、この本部との連携が厄介で、本部では執行部の顔ぶれが替わると方針が替わることに悩まされてきた。ASNETもGJSも、東文研という部局と本部とが連携しながら運営してきたものの、異動や退職などで人的結びつきが変化すると、その支援や協働のあり方が変わってしまうといった脆弱性を抱えていたのである。事実、本部からの支援は徐々に細り、最後には「これらの事業は本来部局が自身の資源を使って実施するものだ」といった解釈までされるようになった。そのためASNETもGJSも、活動を継続することができなかったという苦い経験を持っている。

東文研が置き屋としての性格を持っていたのは、このように学内であっても、本部や他部局と研究上の連携を恒常的に維持することの難しさを、所員自身が感じ取っていたからに他ならない。

二 GAS 誕生の経緯

GASは、GJSの発展形として2022年4月に誕生した(園田, 2024)。GJSが終了したのは、大学本部で新しい日本研究組織である現代日本研究センター(U Tokyo Center for Contemporary Japanese Studies)が2020年7月に立ち上がり、学内に似た日本研究組織が2つは要らないという判断が下されたからである。ところが、この現代日本研究センターも時限付き予

17 東文研の「全所的プロジェクト」としては、文科省の「共同利用・共同研究拠点事業」が挙げられるかもしれないが、これが必ずしも学際的な研究を推進することを謳っていないことから、本報告ではカバーしていない。私が東文研に着任した翌年の2010年から、東洋学情報センターを部分拠点として上記事業に参加し、当時の羽田正所長以下、執行部は相当のエネルギーをかけてこの事業を運営していたからである。しかし、東文研の事業に対する外部評価が芳しくなく、何より東文研内部で上記事業の有効性や必要性に対する懐疑が広がったこともあり、2015年からは同事業に参画しないことになった。こうしたところにも、東文研の置き屋としての特徴が表れていると考えている。

18 ASNETの時系列的な展開については、<https://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/archives/asnet/profile/history.html>を、GJSのそれについては園田(2021)を、それぞれ参照されたい。

算しか獲得できず、担当者の定年退職などで 2024 年 3 月末をもって閉じられる。

東文研の GJS を運指していた私は、日本のアジア研究に適切に「日本」が位置づけられていないことを痛感していたこともあり、2018 年から北京日本学研究中心の運営やアジア次世代日本研究者協働研究ワークショップへの助言・指導で協働作業をしてきた国際交流基金と 2022 年 3 月に MoU を結び、JF-GJS イニシアチブを立ち上げることになった¹⁹。こうした具体的なパートナーシップを構築することで恒常的な資源動員が可能になるし、何より日本のアジア研究とアジアの日本研究の対話という軸ができることで、茫漠としがちな GAS の活動の「屋台骨」を作ろうと考えたのである。

とはいえ、GAS とは何かという本質的な問題は避けて通ることができない。そこで私は、現代日本研究センターが立ち上がる頃から現所長の佐藤仁教授と協議を重ね、Global Asian Studies という新しい旗を掲げるべく論文を共同執筆し、これを IJAS で発表した (Sato and Sonoda, 2021)。そしてこの論文を一種のマニフェストとして、所内で GAS を立ち上げることに注力した。

この論文は、従来の地域研究が、既存のディシプリンが生み出した概念や理論、モデルを当該地域に当てはめようとし、うまく当てはまらない場合にはその微調整を持って是とする outside-in (外のものの中に持ってくる) のアプローチを採ってきたことを批判し、アジアの現実から「普遍」を抉りだし、世界的な討論の俎上に乗せるような工夫をしなければならないと主張するものであった。こうした inside-out (中のものを外に出す) のアプローチこそ、アジア研究のアジア化が進行している時代に必要とされるものであって、旧来のような、ほぼ自国の読者のみを想定した研究から一歩踏み出し、多くの読者との対話を試みなければならないと主張したのである。

この論文は比較的多くの読者を得ることに成功した。GAS の活動を支える若手研究者を公募する際、候補者にこの論文を読むよう課し、その結果採

19 GAS プログラムの旗艦プロジェクトであるイニシアチブに GJS という表現が用いられているのは、このように国際交流基金と MoU を締結していた時点で GAS は存在しておらず、存在していたのが GJS だったからである。

用された現スタッフは、GAS の精神を、この論文の主張に見出しているに違いない。

とはいえ、ASNET や GJS 同様、GAS も全所的なプログラムになっているとはいいがたい。研究対象としている地域の事情によっては、必ずしも英語を用いることが最善の策となっていないし、GAS が立ち上がる以前に着任していた所員にとって inside-out アプローチは、一部教員が東文研の新機軸を打ち出すために作りだしたもので、自身の知的営為とはあまり関係ないと思っているはずである。置き屋の「伝統」は、GAS が立ち上がった後にも残っていたはずで、その GAS の立ち上げを側面支援していた高橋昭雄元所長も、こうした事情をよく理解していたように思う。それどころか、GAS が何を意味するかを意図的に曖昧にしつつ、誰もが参加できる余地を残しておくべきだと考えており、私もこれを踏まえて GAS の運営を行ってきた。

三 東文研ならではの GAS とは？

GAS に具体的な活動がありながら、未だに実態が掴みにくいのは、以上のような事情があるからなのだが、そのため「GAS が何をすべきか」は、絶えず開かれた問いであり続けている。

こうした状態は、東文研の GAS だけに留まらない。Global Asia という概念を用いて自身のプログラムを表現している世界中の研究教育機関が、この概念をどう理解し、具体的にどのような研究教育アジェンダを掲げているかには、相当に個体差がある (Kim and Tangsinmunkong, 2026)。同じ概念も、支える理念や置かれた文脈が大きく異なっているからであって、東文研も自身の置かれた文脈を考えずに GAS を推進することはできないはずだ。

東文研の特徴を活かした GAS の具体的な活動については、所の若い研究者が具体的に提案してくれるだろうが、その際、東文研がカバーする研究者の拡がりから広域的なプロジェクトとすることも、逆に今まで行われてこ

なかった研究領域を深掘りするニッチ戦略を打ち出すことも可能だろう²⁰。私自身は、「(日本を含む) アジア域内の結びつき (inter-connectedness of Asia)」をキーワードに事業を進めるのがよいのではないかと考えている。

私がこのように考えるようになったのには、猪口孝教授が主導されたアジア・バロメーター (AsiaBarometer: 2003-2008) プロジェクトに参加したことが大きい。猪口教授は、アジア域内で断片的にしか作られてこなかった調査データを系統的かつ時系列的に蓄積し、そこから多くの社会科学的な知見を比較の視点から生み出そうとする壮大な構想をお持ちだった。そのため、外部資金を獲得しようと奔走され、実際、科研費の特別推進研究で3億円強の研究費を獲得され (<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-17002002/>)、大規模調査を6年間継続してきた。

この間、アジアバロメーターは多くの成果を生み出し、現在でも同種の試みは台湾を拠点とした Asian Barometer プロジェクト (<https://asianbarometer.org/>) などにも継承されている²¹。大規模なデータセットは、我々が考えたこともない研究のアジェンダを生み出してくれる「打ち出の小槌」で、(理論がデータを作るのではなく) データが理論を作るという新しい時代を切り拓く研究方法だった。

ところが、アジアバロメーターは、アジア域内での比較を企図したものであって、その関係性を炙り出す質問群は、あまり含まれていない。私は笹川平和財団と協力して日本人の対中認識をテーマに調査を実施し、日本人の中に対中認識をめぐる世代差を発見したが (Shi and Sonoda, 2026)、このような (相互) 認識をめぐる問題は、比較政治学的な問題意識に支えられたア

20 私は中央アジアの専門家ではないが、筑波大学の教授で現在、ウズベキスタンの世界経済外交大学の副学長を兼務されているティムール・ダダバエフ教授と多くの共同研究を進め、GAS 内部に中央ユーラシア・イニシアチブを立ち上げたのも (<https://gas.ioc.u-tokyo.ac.jp/cei/>)、今まで日本のアジア研究の中に中央アジアがしっかり位置づけられておらず、中央アジア研究者と他のアジア地域の研究者間の対話が不足していることを実感しているからである。その意味でも、このイニシアチブは典型的なニッチ戦略に基づくプロジェクトとなっている。

21 21 世紀になって盛んになった大規模世論調査の実施も、アジアでは、その継承が大きな課題になりつつある。猪口教授のアジアバロメーターも資金が枯渇し、猪口教授が大学のアドミニで忙しくなったことで活動を終えた。アジアバロメーター (Asian Barometer) も長年けん引してきた朱雲漢教授の逝去により運営体制が脆弱になっており、中央アジアバロメーター (Central Asia Barometer) に至っては、調査環境の悪化に伴い経年調査の実施を中止するに至っている。

ジアバロメーターでは本格的に扱われてこなかった。

東文研の GAS は、この「アジア域内の結びつき」をキーワードに、海外の研究者や研究機関などとの共同研究を通じて、様々な難問——その多くがグローバルな性格を持ち、世界の他の地域も同様に悩まされている問題——に挑戦する革新的な研究を進めることを、そのミッションとして掲げるべきではないかと思っている。実際、バーゼル大学を拠点とした Katekisama Program やニューヨーク大学上海校を拠点とした Global Asia Hub プロジェクトなど、海外で Global Asia という発想に関心を抱く研究機関との連携が出来つつあるのだから、東文研の研究者が積極的に海外連携を進めていくことができる環境は整っているように思う。

四 アジア研究のアジア化を検証する：ある研究の提案

最後に最近、私が関心を持っている研究テーマを、GAS の文脈に即して紹介したい。

東文研で GJS の運営に携わってきたこともあり、海外、とりわけアジアの日本研究を支援している国内の財団とのお付き合いが増えたが、そうした財団の一つに住友財団がある。同財団は 1992 年から現在に至るまで「アジア諸国における日本研究関連助成」プログラムを運営してきており、この 33 年ほどの間に 12,000 件近い研究申請を受け付け、2,000 件近い研究申請に助成を行ってきている。私は財団と共同で、この 12,000 件近い研究申請のタイトルや申請者の属性情報をもとに、アジア各地の日本研究の動向を分析する機会を得て、その成果を 2025 年に報告書として提出している（園田，2025）²²。

タイトルの分析からだけでも多くの興味深い知見が得られたが、中でも印象的だったのが、同じアジアでも日本語ベースの日本研究が主流の東アジア（韓国、台湾、中国など）と、英語ベースの日本研究が主流の東南アジア（フィリピンやシンガポール、マレーシアなど）とでは、申請書に表現されている

22 現在、報告書を換骨奪胎した英語版と、中国の動向に焦点を絞った中国語版とを、それぞれ査読誌に投稿している最中である。

研究者の関心や研究領域、扱う時代に大きな違いが見られたことである。

以下の図は、財団に多くの申請書が提出されている中国とマレーシアをピックアップし、その申請書が扱っている時代の違いを、申請書が提出された時期ごとに比較したものだが、これからも日本研究に占める人文学のウェイトが重い中国では、現代とそれ以外とで申請が半々となっているのに対して、社会科学や学際研究のウェイトが重いマレーシアでは、圧倒的に現代に対する関心が高いこと、そしてこうした特徴の違いは早々に変化するもので

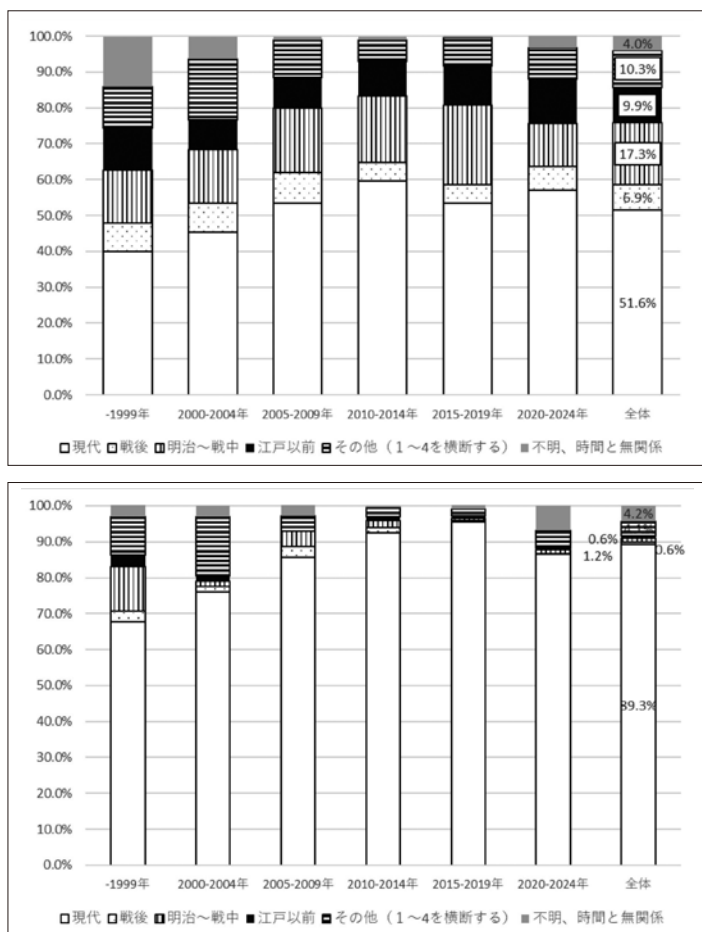


図 採択タイトルの時代別集計——中国（上）とマレーシア（下）の対比
出典）園田（2025: 21）

ないことがわかる。

このように、同じ日本研究といっても、地域によって異なる伝統や文脈があり、それぞれに取り上げられる研究テーマも異なっていることがわかる。ところが、日本国内の日本研究者は、こうした事情をほとんど理解していない。

では、日本以外のアジア地域についてはどうだろう？近年では中国やインドといった大国を研究する研究者も出てきているが、彼らはどこで育成され、どのような問題関心を抱き、何語で成果を発表しているのだろうか？アジアの中国研究、インド研究には、どのような地域的な違いが見られるのだろうか？アジア研究に中央アジアは含まれているのだろうか？このような知の生産に関わる問いは興味深く、今後のアジア研究を論じるためにも重要なはずだが、これを議論する基盤となる包括的なデータが存在していない。

同じ地域研究に従事していても、所属する国によって国内学会が存在し、そのメンバーシップが把握しやすいところもあれば、そうでないところもある。アジア研究の屋台骨を支える研究者の状況を把握するだけでも大変な作業になるが、それこそ「アジア域内の結びつき」を利用した重要な研究課題となりうるはずである。

私は佐藤教授と共同論文を執筆した際、GASは「アジア研究のアジア化が進む時代にあって必要とされる」と述べた。ところがアジアのアジア研究者はどこで育成され、彼らがどのような知的生産を行っているかを俯瞰した研究は存在していない。アジアにあってアジア研究をリードしてきた東文研は、こうした挑戦的なテーマに果敢に取り組んでいく必要があるのではないか。GASが広域的なプロジェクトを進めるにせよ、ニッチ戦略をとるにせよ、これらの基礎情報は必要だろう。

外部資金獲得云々は別にして、東文研の将来を考えるためにも、アジア研究の知の生産の歴史的展開を概観するプロジェクトを実施すべき時に来ているように思うが、いかがだろうか。

参考文献

Kim J. and Tangsinmunkong P. (2026). “Mapping Global Asian Studies:

shared visions, institutional variations, and the local conditions in studies on Asia.” *International Journal of Asian Studies*. Published online May 18. doi:10.1017/S1479591426100771

Sato J. and Sonoda S. (2021). “Asian studies ‘inside-out’: a research agenda for the development of Global Asian Studies.” *International Journal of Asian Studies* 18(2), 207–216. <https://doi.org/10.1017/S1479591421000140>

Shi Y. and Sonoda S. (2026). “A reverse generation gap: Cohort, memory, and Japanese public attitudes toward China.” *International Journal of Asian Studies*. Published online March 25. <https://doi.org/10.1017/S1479591426100710>

Sonoda S. (2014). “IASA as a Geisha House: How we deal with Interdisciplinary Studies” YouTube https://www.youtube.com/watch?v=Lck_MKywP34

園田茂人 (2021) 「GJS (国際総合日本学ネットワーク) 10 年の歩み」『ブックレット GJS Vol. 1 国際総合日本学ネットワーク 10 年の歩み』東京大学東洋文化研究所, 27-50 ページ. <https://gjs.ioc.u-tokyo.ac.jp/data/essays/uploads/GJS-01.pdf>

園田茂人 (2024) 「从 GJS 到 GAS: 东京大学国际综合日本学十年走过的轨迹」(劉玥杨訳)『日本学研究』第 36 輯, 社会科学文献出版社, 1-15 ページ.

園田茂人 (2025) 「アジアにおける日本研究——住友財団「アジア諸国における日本関連研究助成」の申請・採択情報に見る特徴とその歴史的変遷——」住友財団ホームページ https://www.sumitomo.or.jp/pdf/jare/report2025/JapaneseStudiesinAsia_Report_ja.pdf

質疑応答

上田 最後のお話の続きで、各国におけるアジア研究の特徴をデータで把握するとすれば、何からはじめればよいでしょうか。

園田 以前、中島先生にも東文研のフラッグシップ・プログラムを作る必要があるのではないかと提案したことがあります。そもそも、それぞれの国

のアジア研究の範疇がどうなっているかという問題があるのですが、アジア研究の学会があるのか、アジア研究者がリスト化されているのか、彼らはどこで教育を受けているのか、どのような分野の研究なのか、という基本的な特徴を掴むことはできるはずです。

中島 ではこれを今度の科研費研究でやりますか。データをきちんと扱えるメンバーが何人かいますから。

上田 科学史としてのアジア研究というわけですね。

渡邊 アジア諸国では学位や主要言語のデータはとれるものなのでしょうか。

園田 とれるところはとれます。日本研究もそうですが、タイやインドネシアには国家規模の学会がある。ところがフィリピンやマレーシアなどにはない。アジア研究という形で統括している国もあります。そういうところは少し難しくなってくる。

中島 その難しさがわかるだけでも十分な成果でしょうね。それぞれの地域のアジア研究の形がみえる。アジア研究の価値や問題関心、主流の分野やダイナミズムが可視化されていくわけですね。

園田 先ほど上田さんもマレーシアに言及していましたが、住友財団の申請分野もそうだけれど、マレーシアは工学や自然科学領域に日本研究が多い傾向がある。一種の応用事例として日本研究がイメージされている。我々からすれば「これ日本研究ですか」という反応が生まれるくらいに。

中島 これは ASNET の時にも問題になって、文系理系がともに対象だったのですが、理系のアジア研究者が結構多くて驚きました。あれをやめたのは惜しかったですね。全部データが残っていましたから。

上田 最新のデータではなくても、2000～2010年代の動向を把握するという点では重要です。自然科学も含めて全体を見ようとすると難しいところがあるかもしれないので、例えばハーバードやオックスフォードなど主要なアジア研究拠点を対象に深掘りしていくのもいいですね。

中島 ではこれで科研費を是非出してみましょう。我々もこれでアジア研究のどこに投資するかという戦略が立てられるようになります。

園田 この研究を考える時の一つのヒントは、リサーチマップなどを使って

ビッグデータを取り込んで言語処理すればそれですむというわけではなく、やはり意味をもったデータでなければならないということです。彼らはどこで育てられて、それに対してどういう思いをもって研究をしてきたのか。そういう意味を付与されたデータでなければならない。

中島 それこそロバート・ペラーが普通のアメリカ人にインタビューをして「心の習慣 (Habits of the Heart)」を明らかにしたような手法が生きるかもしれませんね。代表的なアジア研究者にインタビューで深掘りしていく。

園田 インタビューを通じて自分でリフレクシブになると、言葉も出てきますからね。一人で研究史を書けといっても、絶対書けないですから。もう一つ、こうした研究を考える契機がありまして。

アジア政経学会では周年事業として「日本のアジア研究者が作った概念で、これから遺産になるものは何か」という会員に対する調査をしたことがあります。例えば、ある関西の先生からは「グローバル・バリュー・チェーン」という概念は実は日本人研究者の発想から生まれたのですよという声がある。そのなかで、ある韓国の先生から重要な問題提起がありました。「アジア政経学会は日本人だけでできているわけではない」と。自分は日本で韓国経済を教わり、今は韓国で教えているけど、アジア政経学会の会員である、アジア政経学会もそうした歴史をふまえる必要があるのではないかと。なるほどそうか、我々もアジア研究者がどういう風に出来上がったのか、そこに学会はどう関与し、どういう効果をもたらしてきたのかということを、きちんと考えなければならないと思ったことがあったのです。

中島 そうしたミクロなデータとマクロなデータを組み合わせていくということです。ずばり「アジア研究の習慣 (Habits of Asian Studies)」はどうでしょうか。

一同 面白そうじゃないですか (笑)。

東洋文化研究所の Global Asian Studiesを どう定義するか

—— パッタジット・タンシンマンコン

一 はじめに

本稿では、東京大学東洋文化研究所における Global Asian Studies、以下 GAS をどのように定義すべきかについて、一つの叩き台を示したい。GAS の定義を考えることは、今後、どのような活動を行うのか、どのような研究を含めるのか、どの言語で発信するのか、そしてどのような研究成果につなげていくのかを考えるうえで、重要な出発点となる。

本稿の主張は、GAS を「概念」としての GAS と、「実践・活動」としての GAS に分けて考えるべきではない、ということである。むしろ、両者は一体のものとして捉える必要がある。GAS とは、アジアをどのように問い直す概念なのか。同時に、東文研においてどのような協働を可能にする実践なのか。この二つを結びつけることで、東文研にふさわしい GAS の定義が見えてくるのではないか。

二 アジアとは何か

Global Asian Studies を定義する前に、まず「アジア」とは何かを問い直す必要がある。この問題については、すでに多くの議論が蓄積されてきた。ここで3つの議論を取り上げたい。Appadurai (2010) は、アジアを人工的な「メタ大陸」として捉え、その境界は自然に存在するものではなく、歴史的な力によって形成されたものだと論じた。より重要なのは、彼が「地理が歴史を作る」のではなく、「歴史が地理を作る」と述べた点である。つまり、地域や文明は、あらかじめ存在する自然な単位ではない。それらは、人間、制度、権力、移動、交易、暴力、想像力によって作られてきた歴史的な産物である。

山室信一(2001)も、アジアを固定された地理的空間としてではなく、

近代日本にとっての思想課題として捉えた。山室によれば、アジアとは、ヨーロッパが作り出した地球区分によって与えられた空間の名称であった。近代日本は、西洋と向き合い、東アジアの他者と関係を結び、自らの位置を構想する過程で、アジアという概念を受け取り、作り替え、利用してきた。山室は、アジアを「思想基軸によって認識された空間」、「思想連鎖によって繋がっていた空間」、「思想投企によって投射・企画された空間」と定義した（山室 2001: 7）。したがって、アジア研究とは、アジアを外側から観察するだけの営みではなく、アジアをめぐる知、関係、構想がどのように作られてきたのかを問い直す営みでもある。

Avenell の議論も、この点を考えるうえで重要である。Avenell (2022) によれば、戦後日本の進歩的知識人にとって、アジアは三つの意味を持っていた。第一に、脱帝国化の理念であり、象徴的な地理であった。第二に、政治的実践の場であった。第三に、日本のアイデンティティをめぐる難問であった。つまり、アジアをどのように想像するかは、日本人が自らの国家をどのように想像するかにも関わっていた。この意味で、Avenell の議論は、アジアが「外にある対象」ではなく、日本自身を問い直すための鏡でもあったことを示している。アジアをどのように想像するかは、日本が自らの帝国の過去、戦後の民主主義、経済発展、国際的役割をどのように理解するかと深く関わっていた。要するに、アジアを語ることは、同時に日本を語ることでもあった。

これらの議論が示しているのは、アジアが固定された地理的範囲だけではなく、歴史的、文化的、地政学的、思想的に構築されてきた概念であるということである。誰が、どの位置から問うのかによって、その意味は変化する。したがって、アジアを語ることは、自らの立場、研究制度、知の作られ方を問い直す自己省察的な営みでもありうる。

三 Global Asia という問題意識

このように考えると、アジアは開かれた概念であり、多角的に研究できる対象である。しかし、冷戦期に形成された伝統的な地域研究には限界があった。King (2005) は、地域を重視するアプローチが、グローバル化の進む

世界において、特定の文化圏・言語圏を固定し、境界を引くものとして批判されてきたと述べる。そうしたアプローチは、時代遅れで、自民族中心的で、狭く、保守的で、本質主義的で、経験主義的だと見なされてきたのである (King 2005: 2)。

Global Asia あるいは Global Asian Studies という概念は、こうした限界を乗り越えようとする試みとして理解できるのではないか。2022 年 11 月から 2024 年 8 月にかけて、園田茂人 GAS 委員会委員長、キム・ジユン助教、そして筆者は、世界各地の十の Global Asia 関連組織のリーダーに半構造化インタビューを行い、それぞれの組織がどのように Global Asia(s) を定義し、実践しているのかを検討した。Kim と Tangsinmunkong (2026) は、このインタビュー調査の結果を整理し、分析した研究成果である。

そこから見えてきたのは、各組織の重点は異なるものの、共通する問題意識があるということである。第一に、冷戦期以来の地域区分や地理的境界への違和感である。第二に、東西の分断、とりわけ西洋中心的な知の構造への批判である。第三に、学問分野の縦割りへの不満である。Global Asia 研究は、アジアを一つの固定された地域として扱うのではなく、アジアと世界のつながりを問い直すための枠組みと言ってよい。それは、国境、地域区分、東西の分断、学問分野の壁を越えようとする知的実践でもある (Kim & Tangsinmunkong 2026)。

ただし、Global Asia は一つの固定されたモデルではない。各大学や研究機関が置かれている条件によって、その形は異なる。国の歴史、地域社会のニーズ、学問的伝統、組織構造、リーダーのビジョン、利用可能な資源は、それぞれ異なるからである。むしろ、各組織の Global Asia 研究は自らの資源と制約を創造的に生かし、アジア研究の新しい形を生み出すためのツールであり、プラットフォームである。

この点から言えば、Global Asian Studies の概念と、その実践・活動は切り離せない。東洋文化研究所における GAS を抽象的な理念としてだけ定義するのではなく、組織が持つ資源を生かし、制約に向き合うための戦略的な枠組みとして定義する必要があると考える。

四 東洋文化研究所の資源と制約

では、東洋文化研究所の資源と制約は何か。まず、強みとして挙げられるのは、東文研そのものが歴史、社会、文化、思想、宗教、文学、交流など、多様なテーマに取り組む研究者が集まっている拠点であるという点である。研究内容の面では、歴史、社会、文化、思想という共通の軸がある（東洋文化研究所公式ウェブサイト参照）。各教員はそれぞれの地域や分野において豊かなネットワークを持ち、研究テーマも互いに接点を持っている。つまり、地域を越え、言語を越え、分野を越えてつながる潜在力がある。

東洋文化研究所には、独自の GAS という研究イニシアチブがあり、さらに、International Journal of Asian Studies や東洋文化研究所アジア研究叢書をはじめとする出版の出口があり、研究成果を発信する基盤もある。「東京大学」および「東洋文化研究所」という名前も、国内外で大きな信頼を持っている。また、日本に位置していること、アジアの中にありながら、アジアのディアスポラとも接点を持つことも重要である。

一方で、制約もある。研究部門が分かれており、活動がそれぞれの「島」の中で完結しやすい。研究が個別化し、分野や地域を越えた対話が自然には生まれにくい。GAS の活動もこれまで活発に行われてきたが、単発のレクチャーが中心であり、持続的な共同研究や出版成果には必ずしもつながりやすくなかった。

だからこそ、東洋文化研究所における GAS には、内部に向けた役割がある。すなわち、地域、言語、分野を越えて研究者をつなぐ「接着剤」としての役割である。GAS は、すでに存在する個々の研究を置き換えるものではない。むしろ、それぞれの研究を同じ場に置き、相互に接続し、新しい対話を生み出すためのプラットフォームである。その一方、外部に向けた役割もある。地域研究の周縁化は、世界各地のアジア研究組織が、同じような課題に向き合っている。従来の地域区分をどう乗り越えるのか。アジアを西洋の外部としてではなく、知を生み出す場としてどう捉えるのか。分野を越えた研究をどのように制度化するのかなど。これらは、Global Asian Studies に関わる多くの組織が共有している問いである。

東洋文化研究所の場合、さらに固有の課題がある。GAS 委員会委員長の

園田茂人教授にインタビューした際、園田教授は、GAS の重要な課題の一つとして、「東洋・西洋・日本」という歴史的な認識枠組みをどのように乗り越えるかという問題を挙げた。日本の学界は長く日本をアジアから切り離し、アジアを「他者」として位置づけてきた。このような視点は、日本とアジアの間に距離を作り、アジアを対話の相手というよりも、研究対象として扱う傾向を強めてきた。また 1941 年に設立された「東洋文化研究所」という制度的・歴史的な遺産と向き合うことも重要な課題である。この点について、園田茂人教授は、意味のある地域研究には、研究対象とされる地域の知識人との密接で相互的な関係が必要であると指摘している。他者との相互作用を通じてこそ、自分たちが何者であるかを理解できるからである (Kim and Tangsinmunkong 2026: 5-6)。

GAS は、このような歴史的文脈を踏まえ、日本におけるアジア研究とアジアにおける日本研究の対話不足、さらに日本の学界における比較・グローバルな視点の過小評価に取り組むものとして位置づけられる (同論文: 7, 13)。GAS は、Global Japan Studies や日本・アジアに関する教育研究ネットワーク (Network for Education and Research on Asia) といった先行する取り組みを背景に発展してきた。とくに Global Japan Studies は、アジアにおける日本研究と、日本におけるアジア研究の対話を促すことを目指していた。その問題意識は、現在の GAS にも引き継がれている (同論文: 5-6, 10)。

以上の経緯を踏まえると、東文研における GAS の課題は、日本をアジアの外に置く認識枠組みを問い直し、日本におけるアジア研究と、アジアにおける日本研究との間に新しい対話の回路を作ることにある。さらに、アジアを研究対象としてだけでなく、知をともに作る相手として捉え直すことでもある。

GAS は、この距離を縮めるための概念になりうる。そして、他者との関係を通じて、自らの立場を問い直すための枠組みでもある。この自己省察的な姿勢、すなわち reflexive な姿勢こそ、東洋文化研究所の GAS にとって重要である。

また、外部との連携を進めるうえでも、GAS は有効である。国際交流基金、

住友財団、Katekissama 国際的な教育・研究協力プログラム、他の Global Asias Initiative などとのネットワークを活かすためには、個々の活動を包み込む包括的な概念が必要である。GAS は、そのための傘となる概念である。

内部に向けては、GAS は接着剤である。外部に向けては、GAS は傘である。この二つの役割を同時に果たすことが、東洋文化研究所の GAS の特徴になる。

五 GAS の定義

以上を踏まえると、東文研における Global Asian Studies は、次のように定義できる。

東文研における Global Asian Studies とは、アジアとそのグローバルなつながりを、概念的、物質的、歴史的に問い直す自己省察的な研究である。それは、相互連関と比較を組み合わせ、協働を通じて実践される研究である²³。

Global Asian Studies is the re-flexive study of Asia(s) and its global connections, examined conceptually, materially, and historically through interconnection, comparison, and collaboration.

この定義で重要なのは、GAS を一つの固定された分野として捉えないことである。「概念的、物質的、歴史的」という表現は、東文研の教員が取り組む多様な研究テーマを広く包み込むためのものである。また、この定義は、「アジアとそのグローバルなつながり」を、「相互連関」と「比較」という分析視点から問い直し、世界中の研究者間の「協働」を通じて実践することを示している。したがって、GAS は、異なる研究、異なる地域、異なる言語、

23 「複数のアジア (Asia(s))」および「自己省察的な (re-flexive)」という表現は、中島隆博教授よりご提案いただいたものである。

異なる立場を同じ場に置き、対話を可能にするための開かれた枠組みであり、プラットフォームである。

ここでいう「自己省察的な研究」(Re-flexive)とは、アジアを研究対象、比較対象として扱うだけではなく、比較を通じて自己をどのように認識し直すのかを問う研究である。また、アジアと世界のつながりの中でどのような差異、摩擦、境界が作られてきたのかを問う場でもある。

東洋文化研究所における GAS は、すでにある研究の多様性を活かしながら、それらを結びつける実践である。そして、アジアの中から、また世界とのつながりの中から、アジア認識と自己認識を再構想するための方法でもある。

参考文献

- Appadurai, Arjun. “How Histories Make Geographies: Circulation and Context in a Global Perspective.” *Transcultural Studies* 1, no. 1 (2010): 4-13. <https://doi.org/10.11588/ts.2010.1.6129>.
- Avenell, Simon. *Asia and Postwar Japan: Deimperialization, Civic Activism, and National Identity*. Cambridge, MA: Harvard University Asia Center, 2022.
- Institute for Advanced Studies on Asia, The University of Tokyo. “東洋文化研究所公式ウェブサイト.” Accessed June 30, 2026. <https://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/faculty/index.html>.
- Kim, Jiyoong, and Pattajit Tangsinmunkong. “Mapping Global Asian Studies: Shared Visions, Institutional Variations, and the Local Conditions in Studies on Asia.” *International Journal of Asian Studies* (2026): 1-15. <https://doi.org/10.1017/S1479591426100771>.
- King, Victor T. *Defining Southeast Asia and the Crisis in Area Studies: Personal Reflections on a Region*. Lund, Sweden: Centre for East and South-East Asian Studies, Lund University, 2005.
- 山室信一『思想課題としてのアジア——基軸・連鎖・投企』. 東京: 岩波書店, 2001.

質疑応答

上田 非常に有効な定義の叩き台が提示されていると思いました。アジア研究とは何かという最初の立論についてですが、実は東文研の歴代の先生もたくさんのアジア論を発表してきたわけですね。飯塚浩二先生や原洋之介先生、田中明彦先生もそうですけど。「アジアのなかの日本」みたいな論題はたくさんあるわけです。でも、そうした東文研発のアジア論がそれぞれ独立していて、批判的で持続的な発展の形になっていない。アジア研究とは何か、という議論や共通認識が必ずしも東文研のなかで引き継がれていないのではないかと思います。

中島 東文研にとってアジアというのが、何というかポスチュレイション（証明なしに受け入れられた命題）になっているのですかね。アジアに日本が入っていなかったこともそうですね。

キム 私たちも今回発表した論文で、様々な Global Asia 研究拠点の代表者にインタビューをするなかで、その地域の具体的現実や研究者個人のなかに根付いたアジアの形、想像力の形があることに気づきました。そうしたアジアの複数性に気付かされました。

中島 では Asias と複数形にしましょう。

タンシンマンコン いいですね。ペンシルベニア州立大の定義もたしか Asias となっていました。

上田 +ing はなくていいですかね（笑）。

中島 +ing は私自身の哲学色が強くなってしまいますが、大丈夫ですか。では、+ing(s) でいきますか。

タンシンマンコン +ing(s) という概念を入れると、もっと疑問が生まれてきそうです。

中島 ざわざわしますよね。

上田 英語に教えるということですね。

中島 これだと絶対に負けませんからね。

園田 でも +ing(s) にしてしまうと、ある種の作為性とか意図というものを相当に意識したアジア研究だけが拾われることになる。すると、ほとんどの人には前提としてなかなか共有されがたいかもしれませんね。

中島 では、この議論はこのあたりでお休みしておきましょう。ひとまず Asia(s) ということは強調しておきましょう。

園田 直近では、早稲田大学の毛里和子さんたちが「現代アジア学の創生」という 21 世紀 COE をされていて、そこの最後でアジアとは何かについてまとめています。結局、アジアの定義それ自体はなくて、どういうモメンタムでアジアがそれぞれの地域で作られているかと言う力学を説明する形になっている。要するに、先ほどのキムさんの話にもあった、「想像されるものとしてのアジア」ということです。アジアを語る側がそういう想像や構想でアジアを研究しているかという、ある意味で reflexive な営みでもある。実際、Asia(s) ということですが、それを明らかにするということは、+ing のプロセスを説明するということでもあるのですね。そういう説明をどこかに書き込めばよいでしょう。

中島 では、Global Asian Studies is the re-flexive study of Asia(s)…ではどうですか。reflexive ではなくて、その古義を生かして re-flexive とする。すると先ほどの「お互いに曲がる」という生成変化の意味をこめることができそうです。

園田 すごいですね。

タンシンマンコン re-flexive study of Asia(s) という三つのワードに GAS の思想を詰めるということですね。

GASとは何か ——私の経験から——

—— 田中 有紀

一 はじめに

Global Asian Studies、すなわち GAS とは何か。これまで GAS の活動に関わる中で、この問いを前にするとき、私はいつも明確な定義から出発することができない。むしろ最初に思い浮かぶのは、自分自身がこれまでどのような場所で学び、どのような人々と出会い、どのような違和感や共感を経験してきたのかという、非常に個人的な記憶である。

私は中国思想史、とりわけ音楽や天文暦法などの技術に関する思想を研究してきた。東京大学で中国思想史研究の基礎を学び、その後、北京大学哲学系に留学しながら、中国の同世代の研究者たちが何を考えているのかを日々考えていた。近年は「東アジアの技術と倫理」というテーマを中心に、海外の様々な研究者と連携しながら東アジア思想の視点から技術について考えている。

こうした歩みを振り返ると、私にとって GAS とは、単に「アジアをグローバルに研究する」という方法論ではない。むしろそれは、自分の中にある複数の知的経験をどう受け止めるかという問いであり、異なる研究文化や価値観を持つ人々と、どのように共に考えることができるのかという実践的な課題である。このような実践的課題は、実はそれぞれの研究者に内在しているのではないか。すなわち、それぞれ「内なる GAS」を持っているのではないか。私自身の経験を語ることは、その一つの例を示すことにすぎない。しかし、その個人的な経験の中にこそ、グローバルアジアという概念を考えるための手がかりがあるようにも思う。

二 東京大学で中国思想を学び、北京大学で中国哲学を学ぶ

私の研究の出発点は、東京大学における中国思想文化学の勉強である。そ

ここでは、一字一句を精密に読み、辞書を引いて語句の意味を確認し、図書館に行って様々な注釈を参照して、さらに先行研究をふまえながら、慎重に文献を読み解くことが求められた。毎週の授業では、予習としてまず授業で用いる古典文献を図書館に探しに行き、文献の字句の解釈、出典調べ、版本による差異、注釈を解説した上で思想史上の位置づけを確認する必要があった。曖昧な理解や大まかな印象だけで議論することはできず、ある言葉がどのような文脈で用いられ、どのような思想的背景を持ち、後世どのように解釈されたのかを、時間の許す限り、できる限り丁寧に調べることが求められた。このような勉強は、私にとって非常に重要なものであった。中国思想史の研究における様々な概念は、抽象的な理念としてはっきりと共有されていたわけではなく、具体的な文献や特定の文脈、表現の中にあり、歴史の中に置かれている。思想を論じるためには、まず文献を読む力が何より必要であるという世界であった。私はこのような環境での学びが、現在でも自分の研究の基盤だと考えている。

その後、私は北京大学哲学系に留学し、中国哲学に関する大学院生向けの授業に毎日参加した。そこで受けた衝撃は大きかった。東大で学んだ中国思想研究の手法は、細部を丁寧に読み史料に即して慎重に読解を進めることを重視していた。一方、北京大学では、膨大な量の文献をどんどん読み進め、中国の古典思想を西洋哲学と結びつけながら、時には現代的な課題として議論することがあった。授業で当てられた学生は、文章の頭から現代中国語で発音して読み流していき、簡単に、しかし皆がわかるように解釈する。興味を引く箇所があればそこに留まり、色々な学生が自由に意見を言う。そのような、日本とは全く異なる方法に戸惑った私は、最初のうちは、学生たちの議論の展開が速すぎるように感じられたし、文献の読み方がやや粗いのではないかと思うこともあった。日本で中国学を学び、中国の大学に来た、私と似たような立場の留学生の中には、同じ違和感を抱く人も少なくなかった。日本の中国学の方が正確で着実であり、中国の哲学研究は大雑把で文献から離れている、好き勝手に議論をしすぎているという感想も耳にした。

私は二年間北京大学に身をおき、授業に出席し、学生たちが主催する読書会にも参加した。彼らと本を読み、議論を聞き、食事をしたりして日常を共

にしてゆくと、単純に「こちらの方法が正しい」「あちらの方法は粗い」とは言えなくなっていった。なぜなら、彼らがどのような教育を受け（たとえば1週間のうち、どんな科目を履修してどのような教科書を使っているのか）、どのような問題意識を持っているのかが、少しずつ見えてきたからである。彼らは古典を、自分自身の問題として引き受けようとしていた。中国思想を、過去の文献としてだけではなく、現在の自分たちの人生や彼らが生きる社会に積極的に関わるものとして語ろうとしていた。そして、その姿勢は、私にとって次第に魅力的なものになったのである。

もちろん、私は日本で受けた訓練を否定するつもりはない。むしろ、文献を丁寧に読むことの重要性は、留学後いっそう強く感じるようになった。しかし同時に、それだけではたどり着けない問いもある。なぜその思想・哲学をいま読むのか。なぜ自分にとってそれが切実なのか。その問いを避けてはならないと思うようになった。この経験は、私にとっての「内なる GAS」の原点である。異なる研究文化に触れるということは、単に新しい知識を得ることではない。それは、自分が当然だと思っていた学問の前提を揺さぶられることである。そして、相手の背景を知れば知るほど、簡単には批判できなくなる。批判する前に、まず理解しなければならない。そうして初めて、自分のことも理解してもらえし、真の意味で批判してもらえるようになる。

三 音楽史、科学史——自分の研究から考える

そもそも、私が音楽の思想を研究するようになったことも、この経験と無関係ではないだろう。私は中国の音楽思想、とりわけ礼楽思想や音律論に関心を持ってきた。中国思想史において音楽は、単なる芸術ではなく、人間の修養や政治のあり方、さらには宇宙の秩序にも深く関わるものであった。中国において音楽は、人間の心を正しくし、人々を調和させ、社会秩序をもたらし、さらには人間の世界を天地の秩序と結びつけるものとして語られてきた。中国思想における音楽研究の意味を、私はいくらかでも語ることはできる。しかし、なぜ私自身が音楽を研究対象に選んだのかを考えると、そこにはやはり私自身の経験がある。中学・高校時代にずっと音楽に親しんできた私にとって、音楽とは何か、音楽が人間にどのような影響を与えるのか、何が良

い音楽なのかという問いは、客観的な研究対象というより、毎日考えなくてはならない自分自身の問題でもあった。

このことに改めて気づいたとき、私は北京大学で出会った学生たちの姿勢を理解できるようになった。彼らが中国思想を自分自身の問題として語ろうとしていたように、私もまた、自分の経験を通じて、中国音楽思想に接近したはずなのである。研究は完全に客観的な営みではない。もちろん、資料やデータに即して根拠を示し、論理的に議論することは必要である。しかし、そもそもなぜその対象に惹かれるのか、なぜその問いを立てるのかという部分には、研究者自身の経験が深く関わっている。GASというプロジェクトを考える上でも、この点は重要であると思う。グローバルな研究とは、個人での探究とは別にあるものではなく、むしろ個人の経験に立ち戻って考えることで、自身の学問が、複数の地域・言語・文化・学問の伝統と交差しうる可能性に気づくことではないだろうか。

私の研究は、中国思想史だけでなく、科学史や術数学といわれる分野とも関わっている。音律学や暦学を扱うと、いわゆる数理的な分野のほか、術数とよばれる、数にまつわる占いや神秘的な領域と向き合うことになる。この領域には、独特の難しさがある。中国思想史の立場から見れば、術数学は思想史上重要な意味を持つ。人々が世界をどのように理解し、未来をどのように予測し、秩序をどのように構想したのかを知る上で、思想史研究において欠かせない対象である。その一方、科学史の立場から見れば、術数に関する思想の中には、現代科学の基準に照らせば明らかに誤っているものも含まれる。ある理論が、自然現象の説明としてどの程度有効で、科学技術の歴史の中でどのような意味を持ったのかという問いは、やはり問われなければならない。私はこの二つの視点のあいだで、常に迷い続けてきた。伝統文化だから、中国固有の思想だからそのまま価値がある、という説明には違和感がある。かといって、現代科学から見て誤っているから無意味だとも言えない。重要なのは、その思想がどのような文脈で生まれ、どのような人々にとって意味を持ち、どのような知的実践を支えていたのかを明らかにすることである。そして同時に、それを現代の私たちがなぜ研究するのかを考えることでもある。

この問題は、GAS にも通じている。アジアの伝統を研究することは、単に固有性を称揚することではない。むしろ、その固有性が他の地域や現代の問題とどのように響き合うのかを考える必要がある。伝統を閉じたものとして扱うのではなく、現在の私との対話、そして分野を越える他者との対話の中で開いていくことが求められる。

四 ニーダム研究所で考えたこと

最近、私はケンブリッジ大学ニーダム研究所を訪問する機会を得た。そこは、中国科学史研究に大きな足跡を残したジョゼフ・ニーダムの蔵書を基礎として作られた、科学史を扱う研究所であり、東アジアの科学史や文明史を扱う研究者が世界中から集っている。

『中国の科学と文明』に代表されるジョゼフ・ニーダムの業績は、中国科学史研究の基盤を作り、大きな影響を与えた。数多くの研究者がそれを乗り越えようとし、ニーダムの説はすでに批判・検証の対象となっている。中国にもヨーロッパに匹敵する科学があった、中国の方が早い段階で到達していた技術がある、中国の理論がヨーロッパに到達していた可能性もある、といった科学史の語り方は、今日の視点から見れば、オリエンタリズムの問題を含んでいる。

しかし、研究所でニーダムが実際に用いたという文献に触れ、また、2025 年度に研究所の所長を招聘した一連の会議において²⁴、ニーダムの置かれた思想的背景を考える中で、私は別の側面にも気づかされた。彼にとって科学とは、ヨーロッパ近代において完成し固定した体系ではなかった。科学は、さまざまな地域の知が合流し、混ざり合い、変化し続ける大きな流れとして捉えられていた。中国・インド・イスラム世界・ヨーロッパの知識は、それぞれ孤立して存在していたのではなく、長い時間をかけて相互に影響し合い、いまの科学を形成している。

このような視点は、単純な東西比較とは異なる。ヨーロッパ科学と中国科

24 たとえば“Joseph Needham’s Intellectual Heritage and Its Contemporary Significance (李約瑟的知识遗产及其在当代的意义)”(2026 年 2 月 6 日、於東京大学東洋文化研究所)など。<https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/blog/20260206-event/>

学を並べ、その優劣を競うのではなく、近代科学そのものが複数の支流によって形成された海のようなものであると考えるのである。その海には、東アジアの知も流れ込んでいる。そして未来の科学もまた、単一の文明によって決定されるのではなく、複数の知的伝統の交差から生まれる可能性がある。私はこの考え方に強く共感した。なぜなら、それは私自身が感じてきた研究のあり方に近かったからである。私たちの物の考え方は、一つの伝統だけで形成されているわけではない。日本で受けた文献学的訓練、中国で触れた哲学的議論、科学史の問題意識、西洋音楽への親しみ、英語圏の研究者との交流、これらが複雑に混ざり合って、現在の私の研究を形作っている。

現在、私は清代の儒者・江永を中心に、礼学、天文暦法、数学のほか、技術にまつわる彼の様々な思想を研究している。江永は、十八世紀中国の知識人であり、礼学を中心に多くの著作を残した人物である。彼は儀礼制度や經学の問題だけでなく、天文暦法や数学、音楽にも深い関心を持っていた。私が関心を持っているのは、江永の思想においては、これらの知が単なる専門的な技術として存在していたのではなく、礼という大きな枠組みの中に位置づけられていた点である。礼とは、人がどのように生き、他者と関係を結び、どのように社会秩序を形成するかに関わる実践である。また形式的な作法に留まらず、その作法によって築かれる人間関係や内面の道徳、社会秩序や身体ふるまい、感情の制御を含む総合的な知ともいえる。江永にとって、天文暦法もまた、このような礼の世界と切り離されてはいなかった。天文暦法は、季節を知り、適切な時期に祭祀を行い、天の秩序と人間の秩序を結びつけるための知である。このような研究を通じて、私は技術と倫理の関係を考えるようになった。

技術は、いかに人間の生活を効率的なものに変え豊かにするかといった観点から語られ、その精密性や革新性に注目されがちであるが、前近代中国において、技術は必ずしも人間の道徳や規範から独立したものではなかった。技術は、人間がどのように世界と関わり、どのように他者と共に生きるかという問題と深く結びついていたのである。この点は、AIや医療など、様々な技術が人間の生を根本から変化させようとしている現代社会にも共通している。技術を単なる道具として扱うのではなく、それが人間と自然のどのよ

うな関係を創りだすのかを考える必要がある。江永の研究は、そのための一つの思想史的視座を与えてくれるのではないか。

ニーダム研究所への訪問の後、私はロンドンにある科学博物館を訪れた。もともとは天文学や機械技術の展示を重点的に見ようと思っていたが、実際には医学史の展示を長時間かけて見ることになった。そこでは、イギリス科学史における輝かしい医療技術の発展の歴史が紹介されているだけでなく、病院で亡くなった身寄りのない人々がどう扱われたのか、患者が孤独の中で如何に過ごしたのか、感染症にかかった人々が社会から隔離される中でどのようなケアを受けたのか、といった問題も展示されていた。医学の発展は、新しい医学技術の発展や、薬や手術や器具の革新だけで語ることではできない。人間が苦しむとき、その苦しみをどのように理解し、死にゆく人をどのように看取るか。障害や病を持つ人を、社会の中でどのように受け入れ支援していくか。こうした問いが、医療技術の発展と不可分に結びついていた。

この経験は、江永研究で考えていたことと響き合った。もちろん、中国の礼学とイギリス医学史のあいだに直接の影響関係があるわけではない。しかし、人間が技術を用いて生きる以上、どの社会でも、技術は倫理と切り離せない問題として現れる。孤独をどうするのか、人と人はどうつながるのか、身体をどう扱い、死をどう受け止めるのか——こうした問いは、地域や時代を超えて現れる。GASの可能性は、このような世界の各地で響き合う心の問いを、共鳴を見いだすことにもあるのではないかと思う。

五 東洋文化研究所の強みと GAS

改めて、東洋文化研究所の強みとは何かを考える。私が思うに、その強みは、それぞれの研究者が確固とした専門分野を持っていることである。歴史学・文学・思想史・宗教学・人類学・考古学・地域研究など、分野はさまざまであるが、その一方で、東洋文化研究所には、異なる専門を持つ研究者が同じ場に集まり、互いの研究に触れる環境がある。自分の専門だけに閉じこもるのではなく、他の分野の問題意識に出会うことができる。GASは、このような環境と非常に相性がよい。GASの活動においては、それぞれの専門性を大切にしながら、その専門性を他者との対話の中で開いていくことが重要

である。そして、専門分野から離れてしまうのではなく、それぞれの研究者が再び専門分野へと戻り、その分野に知を還元していく必要があると考える。

GAS を語るとき、「アジア」や「東洋」という言葉の問題を避けることはできない。これらの言葉には、植民地主義、オリエンタリズム、近代的な地域区分など様々な問題が含まれており、批判無しに用いることはできない。しかし私は、これらの言葉を完全に捨て去るのではなく、むしろ、「アジア」や「東洋」という言葉を、既存の西洋中心的な知の構造を揺さぶるための言葉として使うことはできないだろうかと考えている。それは、アジアの優越性を主張することではない。西洋に対抗して、別の中心を作ることでもない。そうではなく、知のあり方が一つではないこと、近代的な学問体系が唯一の基準ではないこと、異なる歴史を持つ様々な地域から別の問いを立てられることを示すための言葉として、「アジア」や「東洋」を使うのである²⁵。その意味で、GAS は連帯の言葉にもなりうる。異なる専門、異なる地域、異なる言語、異なる研究経験を持つ人々が、自分たちの研究を持ち寄り、互いに耳を傾ける。そのとき、「アジア」や「東洋」は、固定された対象ではなく、対話を始めるための場となる。

この対話において、当たり前であるが、忘れてはいけないことが、相手の話をよく聞くことである。これは非常に単純なことにように見えるが、実際には難しいのではないかと。研究者は、しばしば自分の方法や分野、研究対象に自信を持ちつつ、無意識のうちに、自分の研究の方が重要だと思ってしまうことがある。相手に対して「なぜこちらの方法を取らないのか」「なぜこの問題を考えないのか」と感じてしまうこともある。しかし、その態度こそが対話を難しくし、共同研究の進展を阻害してきたように思う。まず相手の研究に価値があると心から認め、相手がどのような背景からその研究に至ったのかを出来る限り知ろうとし、その上で、自分の考えを提示してみることが必要なのではないかと。東洋文化研究所という小さな研究所にある GAS という活動は、大きな理論を掲げるのではなく、むしろ、そのような小さな対

25 この問題に関しては、丁乙氏（北海道大学）によって 2023 年度に開催された、シリーズ講演・討論「東洋美学の生成と進行」（東アジア藝文書院）に示唆を受けた。

話の積み重ねから始まるのではないだろうか。

六 おわりに

以上のように、私の経験は、必ずしも一貫した理論に集約できるものではない。しかし、そこには確かに一つの感覚がある。思想や哲学、あるいは知そのものは一つの場所、一つの言語に閉じるものではなく、個々の研究者もまたそれぞれの学問領域が持つ伝統だけに縛られるものではない。複数の経験や言語、研究文化が流れ込んでいて、それが一人の研究者の内面を形作っているのではないか。このような、自身の中の複数性を自覚し、それを他者との対話へと開いていく姿勢こそが私の考える「内なる GAS」であり、その姿勢を通じて、自分自身の専門研究をもう一度深く問い直す。「内なる GAS」は、私がこれからどのように研究し、誰に向けて語り、どのような場を作っていきたいのかを考えるための、現在進行形の問いなのである。

質疑応答

渡邊 中国固有の研究方法や伝統をすごく深く知った上で、田中先生自身の研究のスタンスを決めて来られたという経緯がよくわかって、私にとってすごく興味深かったです。私自身も端的に「東洋人のオリエンタリスト」と自己規定したりするのですが、やはり北アフリカというフィールドから遠いというか、外部性が強くなってしまいます。田中先生がご自身の研究をする時に、誰に向けて発信しているのか、ということをおうかがいしたいです。

田中 最近、私は清華大学の友人が主宰している雑誌に論文を投稿したりしています。中国の研究者に向けて、日本の研究はこうなっているということをもまず知らせたいという思いはありますね。いま中国では、行けば行くほど知ってもらえるし、書けば書くほど知ってもらえるっていうメリットがあります。たいして有名ではなくても、オンラインで講座をやればウィーチャットでバズることもあり、大きなチャンスであると思っています。もともと中国への興味が強いので、まずは中国の人に自分の研究を届けられることは嬉しいことです。

アジア・アフリカ域内 研究交流に向けて

—— 渡邊 祥子

一 「異文化の翻訳」を超える

酒井直樹は『日本思想という問題——翻訳と主体』のなかで、「日本」や「日本人」という主体が示すものが現実にはあいまいで捉えがたいものであるにもかかわらず、「日本の思想」を語る営為が歴史的に繰り返されてきた背景として、「翻訳の実践系にもとづく対 - 形象化の図式」を指摘した²⁶。酒井によれば、「翻訳の実践系」とは「一つの言語から他の言語への対称的な変換を維持するイデオロギー」であり、日本的なものに西洋的なものを対置するような比較の枠組みそのものが「基本的に想像的なもの」に過ぎないにもかかわらず、日本論においてこのような比較が繰り返されるのは、翻訳という装置の持つこのような強力な前提が自明視されているからだという²⁷。この前提に基づき、日本論は様々な論者を通じて、しかし一様に、「普遍的な西洋」という言説を構築し、他方においてこれと比較される「特殊な日本」という表象を生産し続けた²⁸。

酒井は日本の知識人における主体概念の形成にかかわるこの問題が、日本のみならず、近代において非西洋世界の知識人が直面した共通の問題であったと示唆している²⁹。酒井の指摘のとおり、非西洋地域の近代におけるナショナリズムの形成は、「民族的」思想、歴史、文学、宗教、さらには芸術、技術などそのあらゆる領域にわたって、内面化されたオリエンタリズムの桎梏

26 酒井直樹『日本思想という問題』（岩波書店、一九九七年）、五二頁。

27 酒井『日本思想』、五二～五三頁。

28 酒井『日本思想』、四七～五二頁。

29 酒井『日本思想』、五〇～五一頁。

と容易に切り離せないものとして起こってきた³⁰。西洋の覇権を克服し、それに追いつくことを目指した非西洋のナショナリストたちの言説は、空想の「西洋」と「母国」の比較を生み出しつづけた点で、西洋と東洋の二項対立の図式の中で東洋を表象したオリエンタリストのそれと対になっていた。

「翻訳の実践系」が内包する問題について、酒井は以下のように述べている。

翻訳される言語を知らない人がいるから翻訳されるのである。翻訳される言語を知らない人間にとって遂行された翻訳が正確なものかそうでないかは知りようがない。なぜなら、その人は翻訳される言語を知らないからである。さらに忠実に翻訳しているという前提があるかぎり、翻訳を遂行する人が、自らが行っている翻訳が正しいものかそうでないかを評価する方法はない³¹。

ここでの問題の一つは、翻訳者（東洋社会を論じる論者）によって翻訳される言語（論者に表象される東洋社会）が、東洋社会の実態を反映したものなのか、反映しているとして果たしてどの程度、そして誰にとって、現実的で忠実な社会像なのかを、誰も問うことがないことである。論者・研究者が研究対象とされている社会の内部者であろうがなかろうが、二項対立的な比較の構造の中で生産される言説は、オリエンタリズムと同じように常に本質主義の罠に陥るリスクを負っている。研究対象の社会に共感や敬意があるから客観的であるという保証はないのである。

日本において中東・北アフリカ研究に取り組むことは、自分自身が文化的、政治的、方法論的に「東洋人のオリエンタリスト」であることを常に意識せ

30 アジア・アフリカのナショナリストが西洋のオリエンタリズムによって「特殊」とみなされた自文化の要素に注目し思想形成に利用したことについては、Partha Chatterjee, *The Nation and Its Fragments: Colonial and Postcolonial Histories* (Princeton: Princeton University Press, 1993), 98, 223-26 を、植民地支配をする側とされる側の文化的なコードの共有については Ashis Nandy, *The Intimate Enemy: Loss and Recovery of Self under Colonialism* (Delhi: Oxford University Press, 1983), 2-4 を参照。エジプトにおける社会科学と植民地統治技術との連続性については、Timothy Mitchell, *Rules of Experts: Egypt, Techno-Politics, Modernity* (Berkeley: University of California Press, 2002), 3-4; Omnia el Shakry, *The Great Social Laboratory: Subjects of Knowledge in Colonial and Postcolonial Egypt* (Stanford: Stanford University Press, 2007), 219 を参照。

31 酒井『日本思想』、五五頁。

ざるを得ない状況に研究者を置き続ける。なぜなら、西洋中心主義的な研究から周縁化されてきた諸地域の経験を身近に感じている点で、日本の中東研究者は中東社会に対する強い共感や内部者に近くあろうとする視点を持つと同時に、文化的帰属の上で、また研究の方法論において、中東地域や中東文化の外にいる者だからである。異文化研究が「文化の翻訳」であるという民族学・文化人類学の古典的な前提に対しては、一九七〇年代以降、研究される社会にとって外部者である研究者の権力性や恣意性を指摘する批判がなされてきた³²。アジア・アフリカ出身者によるアジア・アフリカ地域の異文化研究もまた、このような批判を踏まえて慎重に行われるべきことは言うまでもない³³。タラル・アサドがアーネスト・ゲルナーのイスラーム社会論について指摘したような、研究者が異文化の事象を自文化に内在的な価値に無批判に、強引に引き付けて解釈するような分析はもちろん問題視されねばならない³⁴。それとともに、酒井の「翻訳の実践系」を成り立たせている要素のうち、「西洋」内部の多様性や歴史性を無視した「西洋モデル」が存在する（そして、それに対する差異こそが東洋の特徴である）という前提もまた、批判的に再検討されねばならない。

アジア・アフリカ出身の研究者が異文化を研究する際、アメリカやヨーロッ

32 タラル・アサド「イギリス社会人類学における文化の翻訳という概念」『文化を書く』ジェイムズ・クリフォード、ジョージ・マーカス編、春日直樹ほか訳（紀伊国屋書店、一九九六年）、二六～三〇一頁を参照。日本の研究者では、大塚和夫がこの問題に取り組んでいる（例えば、大塚『異文化としてのイスラーム—社会人類学的視点から—』（同文館、一九八九年）、第1章）。文化翻訳の概念とそれへの批判に関し、大塚の取り組みをまとめた斉藤剛「『文化の翻訳』とイスラーム—社会人類学者大塚和夫の研究とその射程—」『通訳翻訳研究』24号、二〇二四年も参照。

33 この論考では「アジア」概念に代わり「アジア・アフリカ」の地域概念を用いる。その理由は著者が北アフリカ研究者として、エドワード・サイードが批判したオリエンタリズムの対象とされた地域を指す際にこの地理概念を用いるのが明確であると考えていること、冷戦期に新しい世界秩序を目指した国際的運動としてのアジア・アフリカ主義（例えば、Zeyad el Nabolsy, “Lotus and the Self-Representation of Afro-Asian Writers as the Vanguard of Modernity,” *Interventions* 23 (4) (2021): 596–620 が論じるアジア・アフリカ作家会議の活動を参照）が現在もこの地域を理解するうえで重要な遺産になっていると認識していることが理由である。しかし、ラテンアメリカを中心に発展した Decolonial theory の議論（例えば Walter D. Mignolo, *Local Histories/Global Designs: Coloniality, Subaltern Knowledges, and Border Thinking* (Princeton: Princeton University Press, 2000)）や、下で言及する コミュニティ・アクション・リサーチのようにオーストラリア、ニュージーランドで発展したアプローチからも積極的に学ぶべきだと考えている。

34 アサドはゲルナーがモロッコのイスラーム聖者を解釈する語彙の中に「キリスト教的な含み」を指摘する。アサド「イギリス社会人類学」、二八二～八三頁。

パ出身の研究者に対するものとは異なる種類の期待を、とりわけ研究者対象地域の人々から持たれることがある。その期待とは、アジア・アフリカ出身の研究者であればその政治的・文化的背景ゆえに、現在の世界で支配的な研究の「西洋中心主義的」な視点とは「異なる」、「独自の」視点をもたらしてくれるのではないかというものである。「アジア研究のアジア化」がめまぐるしく進展している世界の中で³⁵、今更このような期待について論じることは時代錯誤だろうか。しかし今でも、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの一部の地域について、アメリカやヨーロッパ諸国の研究機関が依然として地域研究の「中心」と目されている状況は存在する。またアジア・アフリカ出身者が自分の出身社会とは異なるアジア・アフリカの「異文化」地域を研究することを志した場合に、出身地域に研究インフラがないためにアメリカやヨーロッパに行かざるを得ないことも、研究地域、分野、言語によってはやはり直面する現実である³⁶。このような権力の不平等があるなかで、同じように周縁化されている地域の「仲間」に、「中心」が生み出すものとは「異なる」視点—願わくはより倫理的で、研究される立場の人たちの立場をよりよく代表する視点—を期待する願望は、きわめて人間的なものでありながら、「東洋人のオリエンタリスト」が持つ高度に政治的な立場性を考慮すれば、危うさをはらんだ欲望でもある。果たしてアジア・アフリカ出身の研究者が「文化の翻訳」者を自任する誘惑や「翻訳の実践系」のイデオロギー性を乗り越え、アジア・アフリカ出身であるという自らの立場性を、研究上の利点として生かすことはできるのだろうか。できるとしたら、いかにしてなのだろうか。

二 アジア・アフリカ研究交流の再考

「グローバル・アジア」研究を論じた Kim と Tangsinmunkong が指摘し

35 Jin Sato and Shigeto Sonoda, “Asian Studies Inside-out: A Research Agenda for the Development of Global Asian Studies,” *International Journal of Asian Studies*, 18 (2021) : 208.

36 オランダ・ライデンの International Institute for Asian Studies がコーディネーターとなった Association for Asian Studies in Africa (A-ASIA) の二〇一二年における設立や、国際会議 “Africa-Asia: A New Axis of Knowledge” の開催 (二〇一五年～) は、このような状況を打開しアフリカにおけるアジア研究を促進させるイニシアチブとして評価できる (URL: <https://www.iiias.asia/networks/africa-asia>, consulted on 25 June 2026)。

たように、研究における権威の構造的な不平等性は、アメリカ・ヨーロッパの研究機関の研究者が理論を構築し、地域研究者はそれを適用してケーススタディーを行うという、既存の学会に残る分業の慣習に現れている³⁷。アジア・アフリカ出身の異文化研究者が陥りやすい陥穽は、研究の中心であるアメリカやヨーロッパで出版された研究をもっぱら理論構築に用い、「フィールド」である地域からは研究データのみを収集するという行為によってこの不平等な構造を強化し、再生産してしまうことである。図1は、アジア・アフリカ地域に属するA地域の研究者が、アジア・アフリカ地域に属するB地域を研究する際、アメリカやヨーロッパの研究センターC地域の先行研究群にのみ依存してしまう状況を示している。この状況において、B地域とC地域の間にはすでに不平等な関係が成立しているが、そこにA地域が加わっても状況は改善されることがわかる。A地域の研究者は出身であるA地域に由来する文化的バイアスと同時に、C地域の研究を無批判に受容することでC地域のバイアスをも持ってしまうかねず、A地域出身であることは研究上の利点としては全く生かされない。また、A地域の研究者はB地域の研究群を「権威ある」ものと見なさず無視すると同時に、B地域の研究者もA地域の研究群を「権威ある」ものと見ないので、A地域の研究成果に関心を持たないか、C地域のものと異なるという基準においてしかA地域を評価しない。AやBの地域で研究者が活発に生産をしても、他地域で読んでもらうためにはC地域で出版せざるを得ない状況は変わらないので、研究の中心はいつまでも不変である。結局、A地域やB地域の学会はそれぞれ孤立したまま、Cの学会に追随するか、Cの学会を批判し「Cと異なること」を主たる正当性の根拠にする研究が量産される。

37 Kim Jiyoung and Pattajit Tangsinmunkong, "Mapping Global Asian Studies: Shared Visions, Institutional Variations, and the Local Conditions in Studies on Asia," *International Journal of Asian Studies*, 115 (2026): 6.

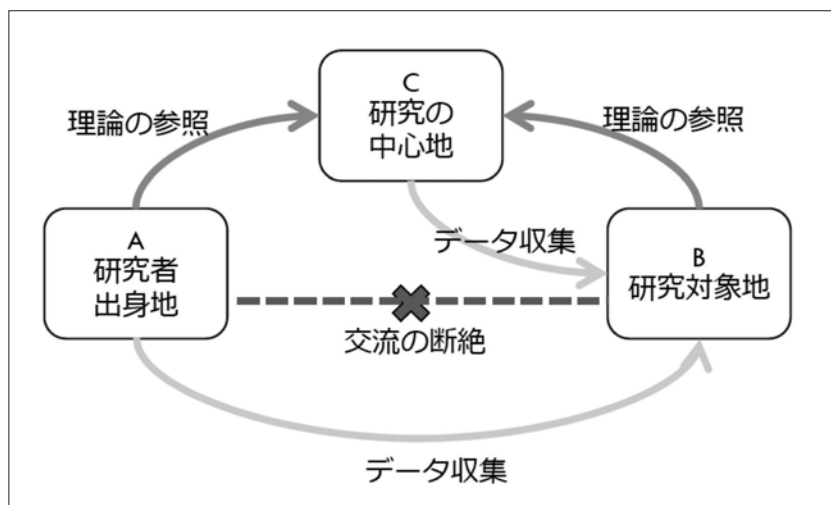


図1 地域間の不平等な関係に基づく研究（出典：筆者作成）

ここでは便宜上、AやBやCが示す領域を地域としたが、このような分断は、地域の間のみならず、制度化された学会の間や研究言語の間にも起きる。例えばマグリブ地域におけるアラビア語とフランス語の学会の間の亀裂は、同一地域内部において分断があり、分断された学会間に多少とも不平等な権力関係が存在する事例である。

このような状況を変えるためには、地域Aと地域Bの学会同士が有意義な直接交流を行い、AとC、BとCの学会間に対等な関係を結ばれることが必要である。AとBの間に行われるような交流（アジア・アフリカ研究交流、南南交流）の試みそのものは、歴史上枚挙にいとまがない。アフリカにおけるアフリカ社会科学研究評議会（Council for the Development of Social Science Research in Africa. 1973年設立。本部はセネガル・ダカール）、アラブ諸国においては1975年に設立されたアラブ統一研究所（Centre for Arab Unity Studies/Markaz dirāsāt al-waḥda al-‘arabiyya。本部はレバノン・ベイルート）などは地域に焦点を当てた知的交流に大きな役割を果たしてきた。研究機関ではないが、インドのサバルタン・スタディーズ・グループの仕事がアジア・アフリカの研究者たちに及ぼした影響—とりわけ、研究

者の語り手としての特権的な立場への鋭い批判と反省的視点は、学術研究における権力の問題に目を向けさせるきっかけとなった—も計り知れない。

しかし、南南学術交流には固有の困難も存在する。その一つは、本来自由に行われるべき学術交流が、研究者が所属する国家同士の関係や政治的状况に影響されてしまうことである。アメリカ、ヨーロッパの研究中心地は、その発信力ゆえに研究者を引き付けるのみならず、政治に左右されがちな地域の間の仲介者としての役割を果たすこともある。マグリブの社会科学研究の「南北問題」に関連して、アルジェリア出身でフランス CNRS において研究活動を行う社会学者 Kamel Chachoua は、マグリブの国々同士の交流の不足を埋めるように、北つまり欧米諸国の学会がマグリブの研究者同士をつないでいる事実を指摘する³⁸。「北」の諸国が主導する学術交流のこのように積極的な側面を認めつつも Chachoua は、「南」の地域の人々が主導的に発展させることのできる新しい研究交流の在り方として、「南」の地域の研究者が地域固有の概念で「南」の社会を説明する枠組みを鍛えること、異なる「南」の地域に行って南南交流を行うことを提案している³⁹。現地語のソースに基づいた、研究される社会固有の世界解釈の在り方を理論に組み込み、さらに「南」同士の地域比較により議論を開いていくことを示唆するこれらの提案は、佐藤と園田が主張する “Inside-out” な視点とも関心を共有している⁴⁰。

社会を内部からとらえるアプローチを尊重し、自らの持つバイアスを自覚しつつ倫理的で建設的な研究と研究交流を実現するために、研究者はどのような立場や方法を志向すればよいのか。研究者は研究対象の完全に外部の、客観的（かつ特権的な）観察者の位置に立って「真実」を発見するという慣習的な考えに対する徹底的な批判は、すでにポストモダニズム、フェミニズム、ポストコロニアル理論等においてなされてきた⁴¹。こうした批判理論の成果に立脚しつつ、研究する行為の利益をコミュニティに還するという形で倫理

38 Kamel Chachoua, “La Perspective d’une science sociale Sud/Sud,” *SociologieS* (2025), URL: <http://journals.openedition.org/sociologies/25148>, consulté le 22 avril 2026.

39 Chachoua, “La Perspective.”

40 Sato and Sonoda, “Asian Studies Inside-out,” 212.

41 リンダ・トゥヒワイ・スミス著、知花愛実、上原こずえ訳『脱植民地化の方法論：研究と先住民』（春風社、二〇二五年）、三三六～三四一頁。

性を実現しようとしているのが、コミュニティ・アクション・リサーチと呼ばれる研究手法である。

オーストラリアやニュージーランドの先住民研究から発展し、社会支援や教育、保健、地域開発などの現場で用いられているこの方法は、研究の目的をコミュニティの直面している問題の解決や困難な状況の改革という実践的な地点に置く。それゆえ、研究においては学会動向ではなくコミュニティの関心が優先事項として扱われなければならないし、コミュニティの成員（ステークホルダー）の世界理解が、研究が扱う出来事の解釈に組み込まなければならない⁴²。ストリンガーによれば、観察、考察、行動というアクション・リサーチの手続きは、絶えず反復される循環的な手続きであり、この繰り返しを通じて研究者は自らの実践を常に省察し、状況に応じて柔軟に行動を修正していく⁴³。ここでは研究を行う主体はあくまでコミュニティ自体であり、外部者である研究者は筆記者、共同執筆者、共編者として関与するものとされる⁴⁴。研究の目的はコミュニティに良き変革をもたらすことであるが、目的が達成されない場合でも、研究のプロセスや合意形成の経験が重視される⁴⁵。

ニュージーランドのマオリ出身の教育者リンダ・トゥヒワイ・スミスは、有益なコミュニティ・アクション・リサーチの例として、マオリの部族（イウィと呼ばれる）共同体がワイタンギ審判所に訴えを持ち込むために組織的に行ってきた調査活動を挙げている⁴⁶。スミスによれば、研究の主体となるコミュニティは、必ずしもイウィのような社会的共同体や、村落のような地理的な共同体とは限らない。例えば先住民女性の状況に関心を持ち、情報共有を行う世界各地の人々のコミュニティ、といった「関心のコミュニティ」も存在するとしている⁴⁷。

42 E. T. ストリンガー著、日黒輝美、磯部卓三監訳『アクション・リサーチ』（フィリア、二〇一二年）、二一二～一三；二三六～三八頁；スミス『脱植民地化の方法論』、二三八頁。

43 ストリンガー『アクション・リサーチ』、一〇頁。

44 ストリンガー『アクション・リサーチ』、二三六頁。

45 スミス『脱植民地化の方法論』、二四二頁。

46 ワイタンギ審判所は、ワイタンギ条約（一八四〇年）に基づきマオリの土地やその他の諸権利を保障する様々な訴えを審議する目的で、一九七五に設立された。ワイタンギ審判所への請求を支援するために研究を行った様々なイウィの活動については、スミス『脱植民地化の方法論』、二四三～四四五頁を参照。

47 スミス、『脱植民地化の方法論』、二四二頁。

私たちが属している学術的なコミュニティ（例えば日本の中東学会、歴史学会など）もまた、困難を抱え変革を必要とする「関心のコミュニティ」の一つといえる。オリエンタリズムによる表象の対象とされてきた歴史と、研究する者とされる者の権力の不平等を対象化し、抗おうとする批判的思想の蓄積は、アジア・アフリカの学術コミュニティを結びつける共通の経験となりうる。アジア・アフリカの地域 A と地域 B の学術コミュニティ同士が、研究する側とされる側という関係性の非対称性を乗り越え、双方が意識的に立場を入れ替えられる関係性を構築することは可能か。もしそれが実現するならば、地域 A と地域 B の学術コミュニティが相互に深く関与し合う、真に双方向的な「コミュニティ・アクション・リサーチ」の可能性が拓かれるはずである。このようなリサーチがアジア・アフリカの研究者交流だけでなく、研究調査活動や出版活動の基礎となり、そのプロセスが広く共有され、評価される未来を想像したい。

参考文献

- タラル・アサド「イギリス社会人類学における文化の翻訳という概念」『文化を書く』ジェイムズ・クリフォード、ジョージ・マーカス編、春日直樹ほか訳、紀伊国屋書店、一九九六年、二六一～三〇一頁
- 大塚和夫『異文化としてのイスラーム—社会人類学的視点から—』同文館、一九八九年
- 斉藤剛『「文化の翻訳」とイスラーム—社会人類学者大塚和夫の研究とその射程—』『通訳翻訳研究』24号、二〇二四年、一～五七頁
- 酒井直樹『日本思想という問題：翻訳と主体』岩波書店、一九九七年
- E. T. ストリンガー著、目黒輝美、磯部卓三監訳『アクション・リサーチ』フィリア、二〇一二年
- リンダ・トゥヒワイ・スミス著、知花愛実、上原こずえ訳『脱植民地化の方法論：研究と先住民』春風社、二〇二五年
- Kamel Chachoua « La Perspective d'une science sociale Sud/Sud » *SociologieS*, mis en ligne le 10 octobre 2025, consulté le 22 avril 2026 (URL : <http://journals.openedition.org/sociologies/25148>).

- Partha Chatterjee. *The Nation and Its Fragments: Colonial and Postcolonial Histories*. Princeton: Princeton University Press, 1993.
- Zeyad el Nabolsy. “Lotus and the Self-Representation of Afro-Asian Writers as the Vanguard of Modernity.” *Interventions* 23(4)(2021): 596–620.
- Omnia el Shakry. *The Great Social Laboratory: Subjects of Knowledge in Colonial and Postcolonial Egypt*. Stanford: Stanford University Press, 2007.
- Jiyeon Kim and Pattajit Tangsinmunkong. “Mapping Global Asian Studies: Shared Visions, Institutional Variations, and the Local Conditions in Studies on Asia.” *International Journal of Asian Studies* 115(2026): 1–15.
- Walter D. Mignolo. *Local Histories/Global Designs: Coloniality, Subaltern Knowledges, and Border Thinking*. Princeton: Princeton University Press, 2000.
- Timothy Mitchell. *Rules of Experts: Egypt, Techno-Politics, Modernity*. Berkeley: University of California Press, 2002.
- Ashis Nandy. *The Intimate Enemy: Loss and Recovery of Self under Colonialism*. Delhi: Oxford University Press, 1983.
- Jin Sato and Shigeto Sonoda. “Asian Studies Inside-out: A Research Agenda for the Development of Global Asian Studies.” *International Journal of Asian Studies* 18 (2021): 207–16.

質疑応答

園田 どこまで第三者性というのを維持できるか。初期値としての第三者性ということはもちろんですが、時間とともに研究をしていくなかで、その境界はすごく揺れ動いてくる。マグリブ地域の研究を深めるために、極東の地で育った自分のポジショナリティをどの程度維持するのがよいか、そもそもそうしたポジショナリティを自己制御することは可能なのか。これらの点について、渡邊先生はどうお考えですか。

渡邊 インターセクショナルという言葉を私は使いますが、それは他者であると同時に、現地の歴史的・社会的事象に対して関心をもった当事者性もあるということです。例えば、私は東アジア人であってイスラム教徒ではありません。マグリブからすれば外部の人間でしょうが、私が女性であることによって、マグリブの女性たちと似たような感覚や経験を共有することはできます。ポジショナリティの変化とは常にそういうものであると私は考えています。ただ、研究環境ということを考えた時には、アルジェリアの研究者と私の環境はやはり違ってくる。また、権力をもった研究の中心地というものもある。それとどういう関係性を結んでいくかという戦略を考えた時に、私は東アジアの人間であるということを自己開示した方がよいと考えてきました。

園田 非常に日本語に熟達していて、日本人以上に日本のことをよく知っているような東アジアの研究者ほど、「自分には日本人を理解できるものが足りない、もっと自分を変えなければいけない」といって、どこまで行っても他者であることの負い目を感じている場合があります。そこまで頑張らなくてもいいのじゃないかとも思うのだけれども、彼らはその負い目から、さらに日本社会の中へ中へと入っていく、そういう戦略をとっているわけです。第三者であるということは、一方では表層的な理解にとどまる危険性もあるけれども、他方ではこうした戦略になりうる。地域研究におけるポジショナリティと研究の創造性というのは非常に複雑な関係をもっていると思います。

渡邊 それは全くその通りだと思います。だからこそ私は、AとBの関係が絶対に重要であると考えています。Cの地域で出版することを最終目的として研究活動をしてしまうと、表層的な知識で地域を論じることになりかねません。そうならないように、常に研究対象の地域の人たちと対話をして、チェックをしていただくということを心がけています。そうするといつも怒られるのですよね、こうした視点は完全にオリエンタリストだと。でも怒られることがチャンスだと思っていまして、現地とヨーロッパ、そして私の理解がどう違うのかを知る手がかりになりますし、その中でどう

オリジナルな研究をしていけるのかを模索することもできます。例えば私がある時代の女性の教育についてデータがないと苦しんでいたら、現地出身の研究者からは「データは集めなくてもいい、仮説でもいいから自分の発想を提示すればよいのだよ」と言われました。でもそれは現地感覚のある人だからできることであって、他者である私ができることではないわけです。ある種の共同作業、協力しあう関係が必要になってくるのだと考えています。

一 アジア研究（者）の居場所

「アジアとは何か」という問いについて私なりに思索を巡らせるために、いくつかの手がかりから紐解いてみたい。まずは、東洋文化研究所の Global Asian Studies (GAS) Initiative の一環として実施した、一連の GAS インタビューから得られた省察から始めよう。このインタビューは、「グローバル・アジア（ズ）(Global Asia (s))」という概念に基づき、それぞれの学際的・分野横断的、そして越境的な学術実践に深く携わってきた世界各地の大学・プログラムとの対話として企画されたものである。

その成果は共著論文としてまとめているが、個人的に特に示唆的であったのは、論文の副題 *Institutional variations, and the local conditions* が指し示す通り、これら学術活動が持つ「複数性」と「位置性 (positionality)」、そこから出発する知の実践であった (Kim & Tangsinmunkong 2026)。この複数性と位置性とは、各地域における「アジア」との関係史、各ローカル・コミュニティを生きるアジアにルーツを持つ人々の移動・移住史、彼らの現在の生活世界、そして各機関や研究者が根付いている知的伝統によって、長年にわたり織りなされてきた結果にほかならない。したがって、「グローバル・アジア研究」とは、従来の地域研究としてのアジア研究が単に名称を変えたものではない。それはむしろ、「アジア」の複数的な現在性や位置性を照らし出す、アジア研究の「個別的特殊性」が前景化する知の現場として解釈される。こうした観察を通じて私は、アジアを問う「(居) 場所」という、今後とも探求し続けなければならない、おそらく一生にわたる課題を得たのである。

「アジア」と関わる自らの研究の「(居) 場所性」を考える際には、いくつかのレイヤーが交差する。韓国の社会文化を基軸に据える私の場合、最近浮

上しつつある「グローバル韓国研究」、各地域における韓国・朝鮮研究の系譜、世界のアジア研究（または東アジア研究）の中に位置付けられる韓国・朝鮮研究の様態、そして韓国における「アジア研究」など、知識生産の時空間性を踏まえた「アジア学」と「韓国学」の相互関係やその系譜が挙げられる。モビリティとメディア・文化にまたがる学際的な立ち位置については、本校では射程外にしよう。焦点をさらに絞り込むならば、日本における韓国・朝鮮研究、さらには日本における「アジア研究」と「韓国・朝鮮研究」の関係性も射程に収めることができる。それぞれの文脈や学知の中で泳ぎながら、自身の研究アイデンティティや役割を探り、居場所を見出すのは、溢れる知識の中で確かに根気の要る作業である。肝要なのは、これら複数のレイヤーをいかに繋げ、さらには自分自身をどのように位置付けたいのか、という点にある。

二 アジアと近接性 (proximity)

未だ自らの位置や役割を模索している途上ではあるが、最近これらの問題を考える際に常に浮かぶ概念が二つある。一つ目は近接性 (proximity)、二つ目はアフォーダンス (affordances：誘引性) である。

もともと心理学や社会心理学の文脈において個人間に生じる親密さや距離感を論じるために用いられていた「近接性」という概念は、異なる文化の間、しかも地理的に離れている社会文化の間の「感情的距離感」を示す概念へと展開した。この「文化的近接性 (cultural proximity)」という概念は、当初は欧米（特にアメリカ）のメディア文化や文化産業による支配的影響（文化的帝国主義）に対する抵抗を理論化する目的で提唱された。技術変化に伴うグローバルなメディアの相互影響、文化的近接性を求める能動的な受容者、ローカルの多様性、そして周辺世界における非対称的な相互依存性などを強調している⁴⁸。すなわち、地理的近接性に必ずしも従属しない、独自の文化的近接感覚を捉えたのだ。

48 Straubhaar, J. D. Beyond media imperialism: Asymmetrical interdependence and cultural proximity. *Critical Studies in Mass Communication*, 8(1), pp. 39-59, 1991.

とりわけ「近接性」とは、単なる物理的・地理的距離に限定されない、文化的、歴史的、経済的、社会的、地政学的、さらには学術的な、「対象との間に想像された距離感」を峻別するために有効な概念的道具と言えよう。これを再び「アジア」へと引き戻して考えるならば、「アジア」に対する体得された感覚はそれぞれの文脈ごとに異なり、それが歴史的、地域的、社会的コンテキストに深く根ざしているという自明の事実から、それぞれの「アジアへの近接性」が立ち現れてくるのである。また、「グローバル・アジア」のあらゆる実践とは、各地域社会の人々が抱く多様な「近接感覚」に基づいた課題設定であり、学術的实践として理解することもできるだろう。

「文化的近接性」とアジア（あるいはアジア研究）を結びつけて考察える契となった、「近接感覚」の非対称性を示す一つの事例を挙げよう。2008年、2013年、2018年の3回にわたって実施された「アジア学生調査」の結果にみる、相互認識上の相違がその例である⁴⁹。以下の図1は「他のアジア人を受け入れられる人間関係の範囲」という質問への回答を、相互に比較する形で整理したものである。

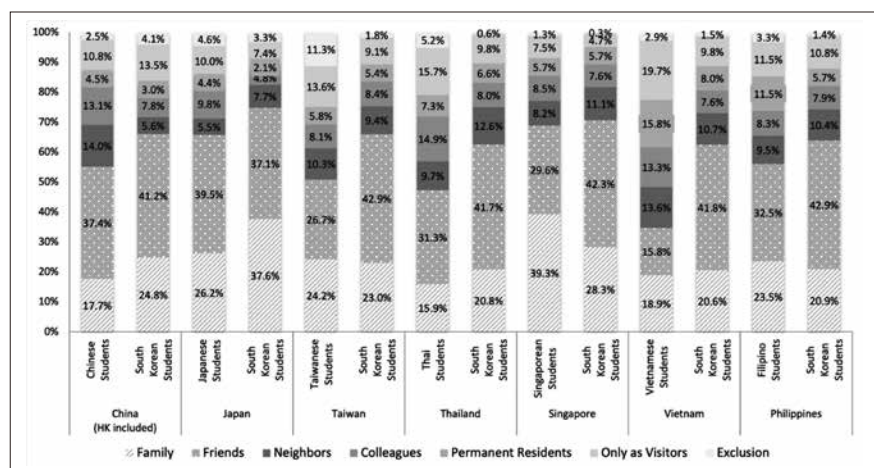


図1 他のアジア人をどの範囲の人間関係まで受け入れるのか（筆者分析・作成）

49 「アジア学生調査」の詳細は、園田茂人『アジアの国民感情：データが明かす人々の対外認識』（中央公論新社、二〇二〇年）、二五三～二五六頁を参照。

例えば、中国と韓国の学生が各質問項目についてどのように答えたかを、視覚的にわかりやすく並べたものである。細部項目を詳しく見ることも、ペアごとの認識の差（あるいはズレ）に注目したい。お互い似たような比率構成を見せる国々もあるが、お互いに一致しない、かなりの格差が共通の傾向として見えてくるのである。要するに、アジア各国の大学生たちにおいて、それが国家の影響であれ、人々の受け入れ程度であれ、相手の「アジア」を身近に感じる度合いには大きな差があるとのことである。だとしたら、近接性、または距離感を引き出す各社会での要因をどのように説明できるのだろうか。ここで3番目の手がかりとして、「アフォーダンス（affordances：誘引性）」を提示したい。

三 アジアとアフォーダンス（affordances）

行動や経験の誘導性・誘引性を意味するこの概念は、もともとプロダクトデザイン、および人間とテクノロジーの相互作用を前提として用いられてきた。デザインや建築の領域から出発したこのアプローチは、近年、ソーシャル・メディアやアルゴリズムへと拡張され、広い範囲でのメディア環境と主体との関係性を考察するなかで、改めての注目を集めている観点である。人々の行動、経験、感情、情動を引き起こす、対象と主体の関係を条件づける、インフラ・ストラクチャ的な側面に目を向けさせてくれるからだ。デザイン領域でアフォーダンスという概念を最初に用いたノーマンは、次のように説明している。

“The term affordance refers to the relationship between a physical object and a person (or for that matter, any interacting agent, whether animal or human, or even machines and robots). An affordance is a relationship between the properties of an object and the capabilities of the agent that determine just how the object could possibly be used. A chair affords (“is for”) support and, therefore, affords sitting. … The presence of an affordance is jointly determined by the qualities of the object and the

abilities of the agent that is interacting. This relational definition of affordance gives considerable difficulty to many people. We are used to thinking that properties are associated with objects. But affordance is not a property. An affordance is a relationship. Whether an affordance exists depends upon the properties of both the object and the agent.”⁵⁰

ここで、「対象 (object)」と「主体 (agent)」を「アジア」と「研究者」に変えてみたらどうだろうか。現在のアジア研究やその系譜には、また「アジア」への想像やその系譜には、いかなるアフォーダンスが機能している（あるいは機能してきた）のだろうか。前述した近接感覚や距離感覚を築く誘引の装置や条件は何であろうか。アジアと近接性の概念を結合させた岩淵 (2018) は、地理的に近いものの感情的には遠いアジアの隣国との関係において、「近接する敵」の感覚 (the sense and rise of proximate enemies, both internal and external)、またはその亡霊 (the haunt of proximate enemies) が作用していると論じている。特に東アジアと日本の事例に焦点を当て、共通の基盤としてメディアや大衆文化、反感 (anti-sentiment)、ジンゴイズム (jingoism: 排他的盲目主義) を挙げたのである⁵¹。アフォーダンスという観点を接合するのであれば、これら共通の基盤が「敵対的感覚」を誘引するアフォーダンスのメカニズムとして作用したと言えるだろう。

このようなアフォーダンスの観点を時系列的、また歴史社会的に展開していく過程で交錯する概念が、おそらく「経路依存性 (path dependence)」になるだろう。経路依存性とは、社会心理学、経済学から歴史社会学までの領域で用いられ、特定の経路が固着してパタンになり、そこからの転換や離脱が難しくなる自己強化的、蓄積的なメカニズムを論じるための理論的道具として使用されてきた。経路が固着されるまでは、偶発的・決定的局面の中で、

50 Norman, D. A. *The design of everyday things* (Revised and expanded ed.), p.10, 2013.

51 Iwabuchi, K. East Asian Rivalry, Digital Media and Proximate Enemies in Japan. *아시아리뷰*, 7(2), pp. 183-204, 2018.

作用・反作用の弁証的な過程が繰り返されることになる⁵²。経路依存性の観点に基づきつつ、近現代アジアの多重的かつ重層的な時間や矛盾を解釈したイム（2014）は、それを周辺的近代世界・社会での経験を構造づけてきた「非同時性の同時性」として説明する。特にこれら非同時性の時間の間での、共存より「衝突」に注目し、韓国の政治的時間を事例に分析している。イムは、「圧縮的な近代化が起こる辺境の近代においては、衝突の時間が共存の時間を圧倒する」と述べる一方、「近代を建設するにあたって、資本と同等の比重で軍人や政治家たちが核心的な役割を果たした」（32 頁）と、誰が、いかなる「近代時間」を主導してきたか、またそうしようとしているかの「主体」の問題を指摘した。

このように、ミクロな人間ともの・テクノロジーの相互作用であれ、歴史社会的な変化であれ、アフォーダンスの観点を持つことにより、対象、主体、契機や局面、アフォーダンスのテクノロジーの行為者性と相互関係がより明確に見えてくる。アジア研究や「アジア」へのあらゆる想像について、アフォーダンスの視野をより積極的に取り入れることができるだろう。

四 「身近なアジア」という地平から

以上、アジア研究（者）の居場所を省察・追究するにあたり、手がかりとなるいくつかの概念を取り上げてみた。いささか粗削りではあるが、アジア研究（者）の（居）場所性、近接性、アフォーダンスという思索に触れながら、アジア（研究）に向き合うための作法を探求し、提案してきた。ここから徐々に踏み出し、より身近な次元でアジア研究を進めていくことが、今後の課題として残されている。

現象として、研究として、また研究者の「省察性（reflexivity）」として、「身近なアジア」がどこから来て、どこに置かれているのかと問うことができる。「身近なアジア」はいかなる地理的・文化的・学術的・歴史的「近接性」から、どのようなアフォーダンスの装置や経路によって生じていたのか。また、そ

52 Mahoney, J. Path Dependence in Historical Sociology. *Theory and Society*, 29(4), pp. 507-548, 2000.

れを今現在どのように思索すべきなのか。そして、どのような想像力に基づき、いかなる「インフラ」を想像・デザインできるのだろうか⁵³。

最後に、私にとって、また韓国社会文化や韓国研究において、「身近なアジア (proximate Asia(s))」とは何か。これら多層的な身近なアジアを観察し続けることが、「グローバル・アジア」を通じての私の問いになるだろう。おそらくここ3年半の間、GASに携わりながら私の体得した「インサイド・アウト・アプローチ (inside-out approach)」(Sato & Sonoda 2021) という知見は、膨大な「世界」としての「グローバル」を論じるのではなく、身近にある複数のアジアについて語ること、すなわち「内なるグローバル」を見つけ出すことを意味するのではないかと、今一度考えている。

想像力としての、位置性としての「Other Asias (別様のアジアたち)」を提唱しながら、ガヤトリ・C・スピヴァクは書いていた。

「アジア」という名に、起源の統一性など存在しない。今日、我々がその名を主張する時、私たちは分離される。この点を改善するためには、社会科学と人文学が共に歩まなければならない。知識の生産は、想像力を鍛えることによって代理補充されなければならないのだ。私たちは、アジア系アメリカの間で示された統合の努力に敬意を払う。しかし、それは私たちのモデルにはなるわけではない⁵⁴。(韓国版より日本語訳は筆者)

言い換えれば、どこに立って、どのような立場から（あるいは、どのような立場に投影された）、いかなる「アジア」を語れるのか。「グローバル・アジア (ズ)」は、異なり得る「アジア」への想像力やその条件を前提としつつ、そうした居場所を問い続ける思索の空間であるとする。

53 例えば、次なる課題の一つは、韓国でのアジア想像の系譜を私なりに再検討してみることになるだろう。アジア（または、東アジア、韓国）の社会で生まれ育った、アジア人としての想像力にどう向き合えるのか。近現代韓国での「アジア」想像や言説空間の系譜について、山ほどの先行研究や言説を私なりに読み直す作業は、別の機会を設けることにしよう。

54 Spivak, G. C. 『다른 여러 아시아 (Other Asias)』 テ・ヘスク、2008年（2011年韓国語訳）、317頁。

参考文献

- イム・ヒョクベク『비동시성의 동시성 - 한국 근대정치의 다중적 시간』 고려대학교출판부, 2014.
- Iwabuchi, K. East Asian Rivalry, Digital Media and Proximate Enemies in Japan. *아시아리뷰*, 7(2), pp. 183-204, 2018.
- Kim, J & Tangsinmunkong, P. “Mapping Global Asian Studies: Shared Visions, Institutional Variations, and the Local Conditions in Studies on Asia.” *International Journal of Asian Studies* 115, pp. 1-15, 2026.
- Mahoney, J. Path Dependence in Historical Sociology. *Theory and Society*, 29(4), pp. 507-548, 2000.
- Norman, D. A. *The design of everyday things* (Revised and expanded ed.). Basic Books, 2013.
- Orgad, S. *Media Representation and the Global Imagination*. Polity Press, 2012.
- Sato, J and Sonoda, S. Asian Studies Inside-out: A Research Agenda for the Development of Global Asian Studies. *International Journal of Asian Studies* 18, pp. 207-216, 2021.
- 園田茂人『アジアの国民感情：データが明かす人々の対外認識』中央公論新社、二〇二〇年
- Spivak, G. C. 『다른 여러 아시아 (Other Asias)』テ・ヘスク訳、2008 年(2011 年韓国語版)、울력 (※英語原著：Spivak, G. C. 2008. *Other Asias*. Blackwell Publishing.)
- Straubhaar, J. D. Beyond media imperialism: Asymmetrical interdependence and cultural proximity. *Critical Studies in Mass Communication*, 8(1), pp. 39-59, 1991.

質疑応答

園田 ジュンさんとは英語ではなく日本語で話すのが不思議な感じなのですが（笑）。ジュンさんの論文のなかで特に印象的だったのは、社会主義体制が認められていなかった韓国において、移動という経験を伴うことで、

ソビエトや中国の見え方が変化していくという点でした。日本でも中国でもそうですが、グローバルアジアを想像するという時に、中央アジアがなかなか出てきません。しかし、韓国では北朝鮮を超えて、中央アジアが比較的容易に入ってくる。今もものすごい人の流れが生まれている。韓国が大きな社会変化のなかで、中央アジアや旧社会主義圏の地域をどのように見ているのかということ、エビデンスをもって示すだけでも、非常に面白いことになると思います。今は対話可能な概念を見つけては、いろいろな知的試行錯誤を繰り返している段階かと思いますが、そこまでなくても、エビデンスを具体的に示すだけで十分に対話可能になるのではないかという感じがしました。なんだか論文指導みたいになっちゃいましたね(笑)。

キム いえいえ、本当にありがとうございます。

中島 ある時期から韓国と台湾が仲良くしはじめるようになりました。その際、韓国ではそれ以前は中国に留学していた人たちがみな台湾に行っただけです。そうするとガラッと、ソーシャル・イマジナリーが変わってくる。そういう瞬間があったということを韓国の研究所の方からうかがいました。でもどう変わったのかと聞いても、案外みんな具体的にわかっていないようです。そうした対話を進めるための具体的な材料を集めるとよいかもしれないですね。

キム ありがとうございます。私は今回、想像という概念を積極的に用いて、そうすることで、アジアの想像の複数性や、想像力の持つ対抗力、オルタナティブな変化を生む力というところを強調したかったのだと思います。今日いただいた意見をふまえて、改めて考えてみたいと思います。

編著者紹介

中島 隆博（なかじま・たかひろ）

東京大学東洋文化研究所教授。専門は中国哲学、日本哲学、比較哲学、世界哲学。主著に『日本の近代思想を読みなおす 1 哲学』（東京大学出版会、2023 年）、『中国哲学史——諸子百家から朱子学、現代の新儒家まで』（中公新書、2022 年）、『危機の時代の哲学——想像力のディスクール』（東京大学出版会、2021 年）。

上田 遥（うえだ・はるか）

東京大学東洋文化研究所講師。専門は食の社会学、農業経済学、東アジアの食文化研究。主著に『日本栄養思想史』（昭和堂、2025 年）、『食の豊かさ 食の貧困』（名古屋大学出版会、2024 年）、『食育の理論と教授法』（昭和堂、2021 年）。

園田 茂人（そのだ・しげと）

東京大学東洋文化研究所特任教授・名誉教授。専門は社会学、アジア研究。主な近著に *Strategic Silences and Narrative Power in International Relations* (with Timur Dadabaev). Routledge, 2026. 『日中交流——人と人とが紡いできた半世紀』（東京大学出版会、2025 年）など。

パッタジット・タンシンマンコン

東京大学東洋文化研究所准教授。専門は東南アジアの対外認識と歴史叙述。主著・主要論文に、Reframing a Genocide: Strategic Narratives and the Legitimation of Thailand's Support for the Khmer Rouge (*TRaNS: Trans-Regional and -National Studies of Southeast Asia*, 2026)、『タイ外交史を読み直す——「竹の外交論」からの脱却』（東京大学出版会、2025 年）など。

田中 有紀（たなか・ゆうき）

東京大学東洋文化研究所准教授。専門は中国思想史、中国の科学・技術と音楽の思想。主著に『中国の音楽思想——朱載堉と十二平均律』（東京大学出版会、2018 年）、『中国の音楽論と平均律——儒教における楽の思想』（風響社、2014 年）。

渡邊 祥子（わたなべ・しょうこ）

東京大学東洋文化研究所准教授。専門は北アフリカ・マグリブ近現代史。主著に *The Islamic Reform Movement of the Association of Algerian ‘Ulama’, 1931–1954: Between Politics and the Religious Sphere*. Leiden: Brill, 2026.

キム・ジユン（金知允）

東京大学東洋文化研究所助教。専門はメディア文化研究、モビリティ研究、歴史社会学。主要論文に「텔레비전 역사드라마의 이양인（異様人）재현과 이질적 타자성의 서사（テレビ歴史ドラマにおける『異様人』の再現と異質的他者性の物語）」（2025年）、「The Danger Anyone Can Encounter’: Security Education Film, Overseas Travelers, and the Location of Global Mobility in South Korea in the 1980s」（2024年）など。

アジアとは何か

——Global Asian Studiesの再出発——

2026年7月30日発行

発行者 東京大学東洋文化研究所GAS委員会

東京都文京区本郷7-3-1(東京大学本郷キャンパス内)

編著 中島 隆博・上田 遥

印刷所 株式会社サンワ

INDEX

はじめに

中島 隆博

第一章 Asia-ing(s)

中島 隆博

第二章 圧縮近代のなかのアジア

上田 遥

第三章 GAS という企図——過去の省察から将来のビジョンへ——

園田 茂人

第四章 東洋文化研究所の Global Asian Studies をどう定義するか

パッタジット・タンシンマンコン

第五章 GAS とは何か——私の経験から——

田中 有紀

第六章 アジア・アフリカ域内研究交流に向けて

渡邊 様子

第七章 身近なアジア

キム・ジユン

編著者紹介